平成１８年度文化財講演会

見田方遺跡発掘４０周年記念講演会

「　越谷に古代が見つかった　」

「見田方遺跡発掘の思い出」講演会資料

講　師：NPO 法人越谷市郷土研究会　常任理事　　髙﨑　力　氏

日　時：平成１８年8月２６日（土）午後1時３０分から

場　所：越谷市中央市民会館　１階劇場

主　催：NPO 法人越谷市郷土研究会　　越谷市教育委員会

平成１８年度文化財講演会　　「見田方遺跡発掘の思い出」

講師：髙﨑　力氏（ＮＰＯ法人越谷市郷土研究会　常任理事）

講演会資料　目次

ページ番号	内　容	ページ番号	内　容
P1	見田方遺跡発掘調査委員会組織名簿、位置図	P20	遺物（1土器、1イG出土土器）
P2	迅速図	P21	6ロG出土土器、6イG出土土器
P3	旧河道と微形地	P22	手捏土器、10イG出土土器
P4	一本杉付近原図	P23	10ロG出土土器、11イG出土土器
P5	発掘地と耕地整理図	P24	12イG出土土器
P6	見田方遺跡の発見から発掘調査までの経過1	P25	13イG出土土器
P7	見田方遺跡の発見から発掘調査までの経過2	P26	表面採集土器
P8	ボーリング柱状図	P27	出土土器に関する問題
P9	発掘の経過1	P28	土錘・漁網・祭具・石器類
P10	発掘の経過2	P29	木製品、樹種
P11	遺跡全体図	P30	樹種顕微鏡写真
P12	各グリッド計測図	P31	見田方遺跡まとめ（和島誠一氏稿）
P13	住居址と遺構、1号住居図版	P32	大塚伴鹿市長遺稿
P14	1号住居址計測図	P33	平成10年度見田方遺跡発掘調査
P15	2号住居址計測図	P34	大道遺跡全体図写真
P16	1号遺構、2号遺構	P35	大道遺跡案内図と出土状況写真
P17	2号遺構内土器出土状態	P36	大道遺跡遺構配置図
P18	2号遺構と3号遺構	P37	大道遺跡遺構概要
P19	4号遺構・5号以降（図版）		

見田方遺跡発掘調査報告書
昭和46年3月発行
発行　越谷市教育委員会
印刷　株式会社　敬美堂印刷所
千葉市下蕨台510

見田方遺跡発掘調査委員会

顧　問　大塚伴蕊（越谷市長）
委員長　秋山長作（越谷市教育長）
副委員長　大野伊右衛門（越谷市文化財調査委員長）
委　員　矢島茂重（教育次長）会計担当
〃　木村信次（越谷市立図書館長）渉外担当
〃　新井英彦（越谷市文化財調査委員）
〃　金井忠夫（不動岡高校教諭）マネージャー
〃　高崎　力（越谷市立東中学校教諭）マネージャー

発掘指導者

三友国五郎　埼玉大学教授　　小泉　功　川越高校教諭
和島誠一　岡山大学教授　　中村嘉男　資源研嘱託

発掘調査協力委員

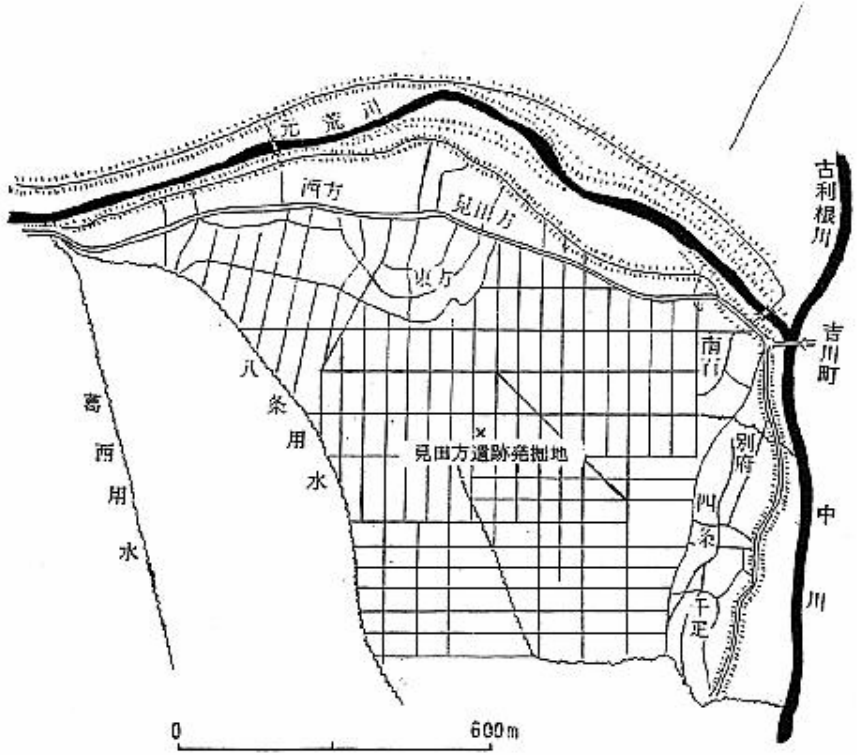
地元市議会議員　　婦人会長
土地整理組合長　　大相模小学校長
自治会長　　東中学校長

発掘調査団

和島誠一（岡山大学教授）　　中村嘉男（資源科学研究所嘱託）
三友国五郎（埼玉大学教授）　　高崎　力（越谷市立東中学校教諭）
小泉　功（川越高校教諭）　　金井忠夫（不動岡高校教諭）
坂本　彰　（国学院大学学生）　　若山民雄　（立教大学学生）
荻島加津子（明治大学学生）　　松尾鉄城　（立正大学学生）
松永佳美　（東洋大学学生）　　山口隆夫　（和光大学学生）
堀井磯夫　（　〃　）　　浜谷義之　（立正大学生）
本堂寿一　（　〃　）　　秋山泰雄　（東京薬科大学生）
鈴木正志　（　〃　）　　小久保勉　（明治大学生）
佐藤和雄　（立教大学学生）
越田賢一郎（　〃　）

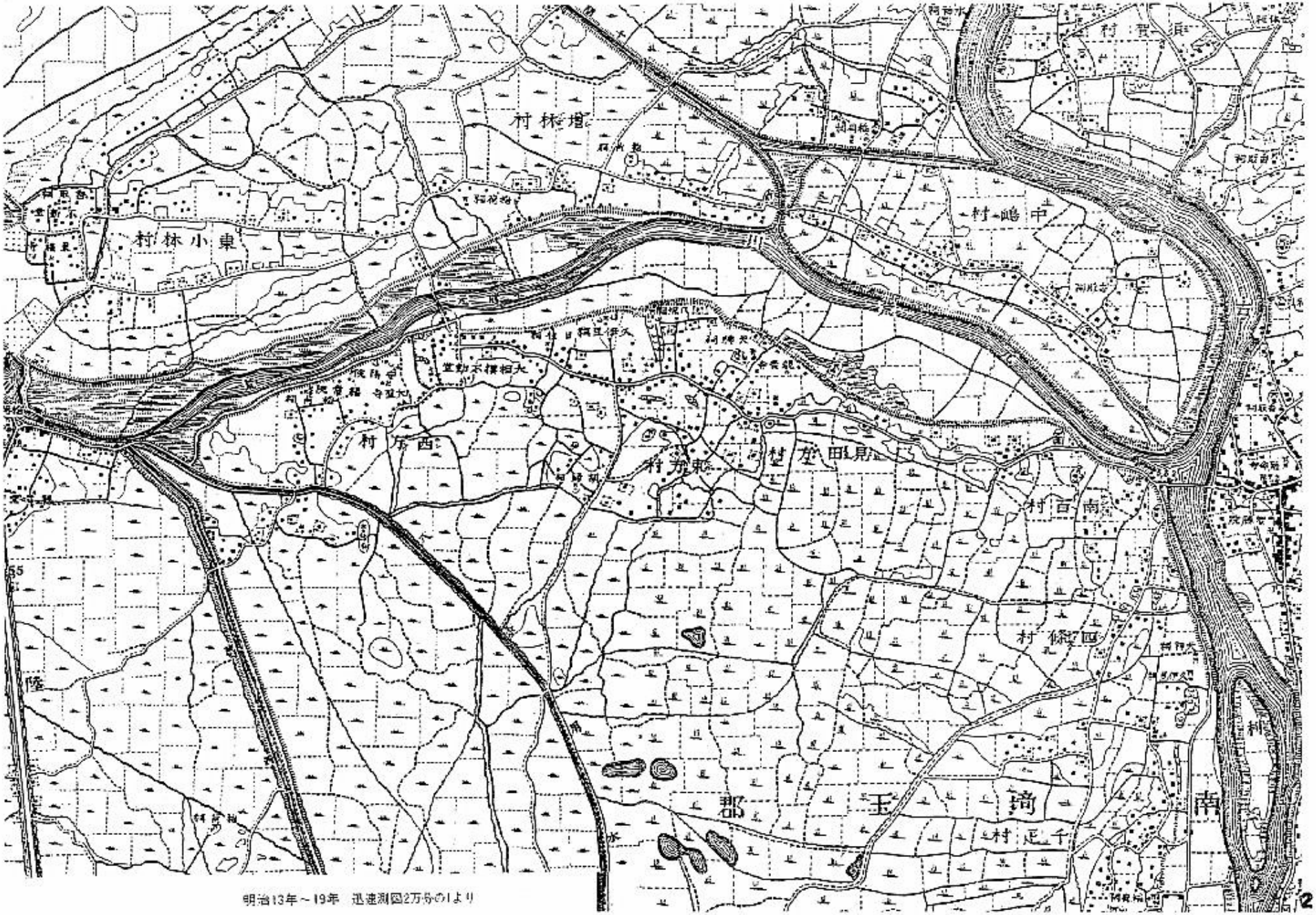
位置（第1図）

越谷市は埼玉県の東南部にあり、西は大宮、岩槻の台地、東は千葉県側の下総台地にはさまれた沖積低地である。西の境界に綾瀬川、東の境界に古利根川、そして中央部に元荒川の諸川がそれぞれ東南流している。市域は東西8.6km、南北11.5kmで見田方遺跡は市の東南部にあたる大相模地区

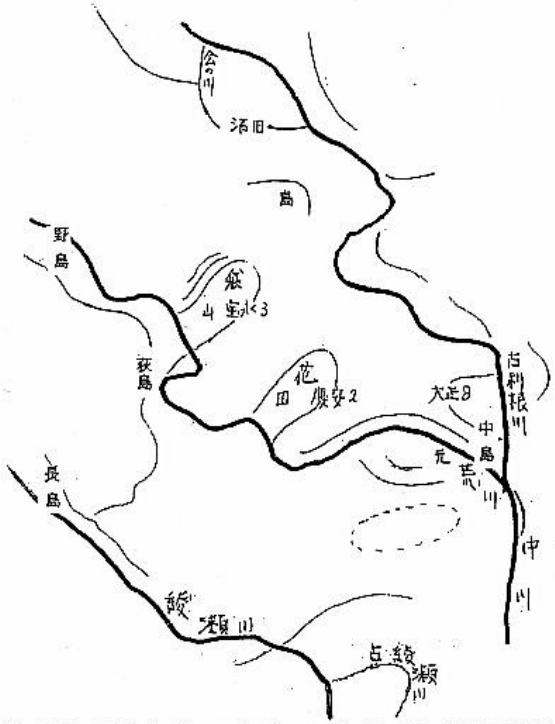


第1図　越谷市大相模地区

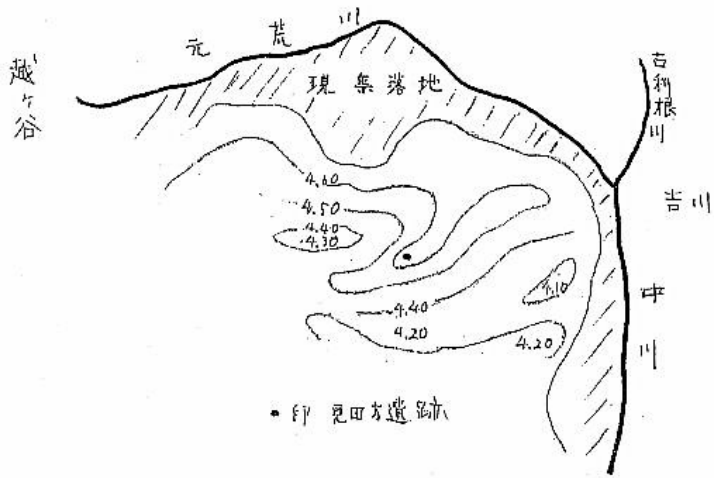
のほぼ中央にある。大相模地区は北に元荒川、東に中川（上流は古利根川）、西にやや離れて綾瀬川があり、集落はこれらの河川により形成された自然堤防上にある。見田方遺跡名は、その位置が大字見田方地区にあることから名づけたものである。



明治13年～19年　迅速測図2万分の1より



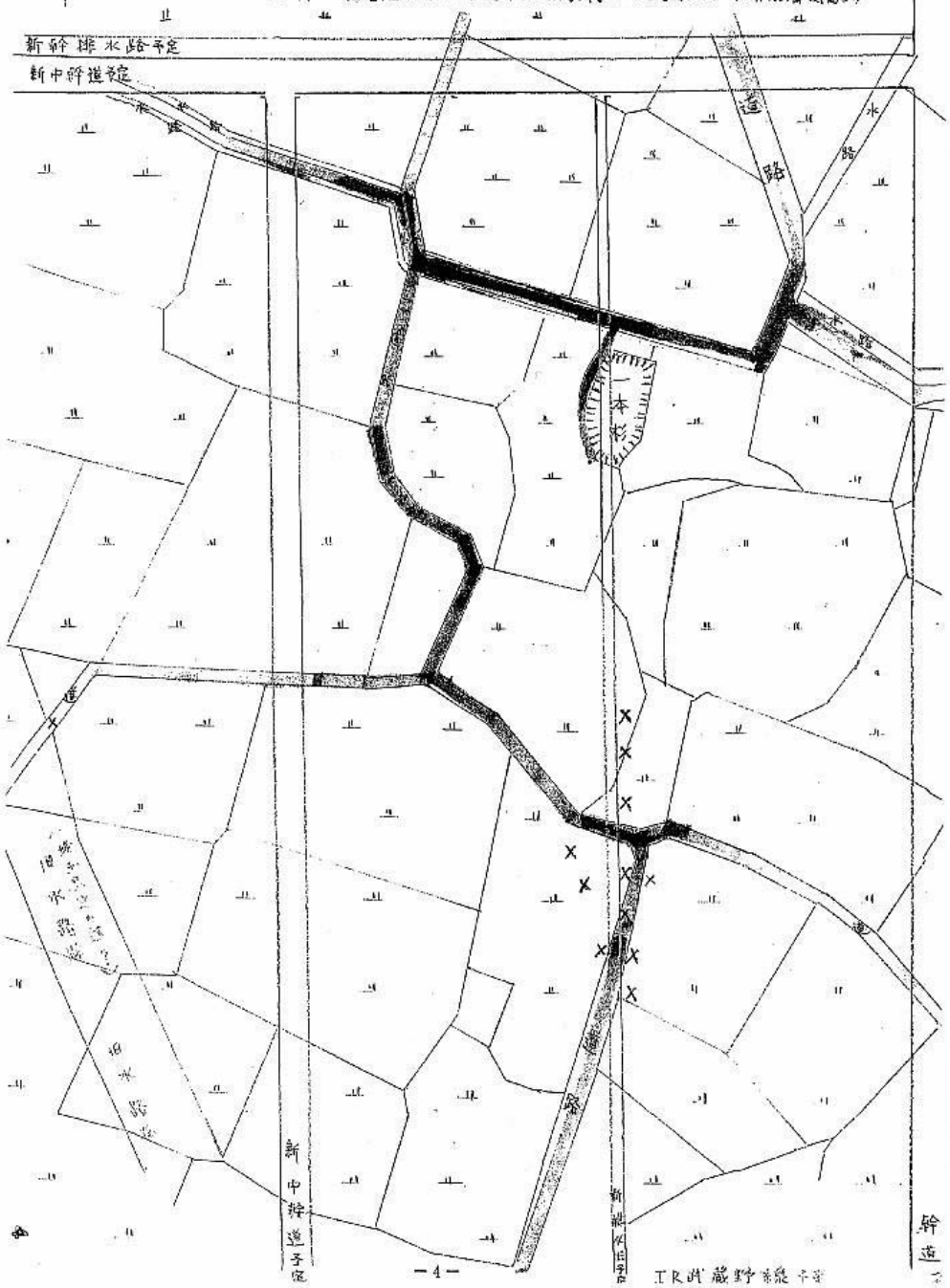
第１図　越谷市域の旧河道、旧自然堤防（埋没堤防）

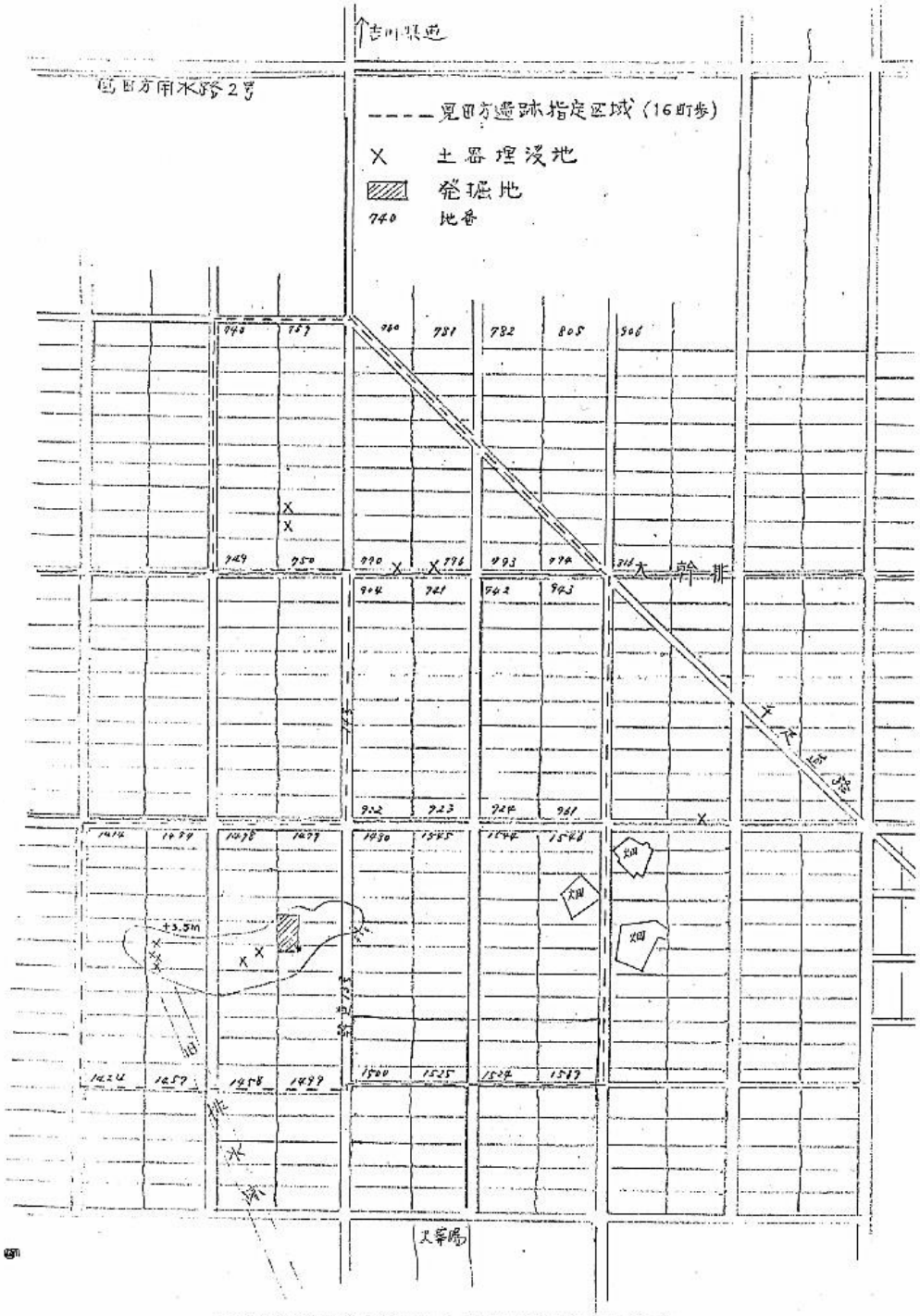


第２図　大相模地区の微地形

第３図　一本杉付近の原図（記名は耕地整理による新規道路・水路）

× 印＝住居址および土器破片採集場所。主に道路脇および小排水溝側面より




吉川県道
篤田方用水路2号
----見田方遺跡指定区域（16町歩）
X 土器埋没地
発掘地
740 地番
大幹排
畑
畑
畑
+3.5m
大幹排
大学場

1．越谷市域の旧河道・旧自然堤防（埋没自然堤防を含む）（第１図）

2．大相模地区の微地形（第２図）

3．大相模耕地内の“一本杉”について

4．見田方遺跡の発見から発掘調査までの経過

昭和34年4月	「越谷市の史蹟と伝説」の調査時に大相模耕地のほぼ中央に位置する通称"一本杉"を古墳と想定して調査する。 近くの土抜水田より素焼きの土玉を採集（後年“土錘”と判定する）
昭和35年2月	大相模地区耕地整理事業第一年次にて通称"四条落し"といわれた大排水路に沿って幹排工事中素焼きのカメ１個発掘し工事班長篠田さんより高崎の許に届けられた。（写真１）
昭和35年3月	埼玉県史編集長稲村担元氏の真大山大聖寺の訪問があり、上記カメを持参して見解を伺う。 以後、乾田期に大相模耕地整理事業現場に通う。
昭和36年1月	大相模地区耕地整理事業は一本杉付近に達し、排水溝・道路を新設す。 一本杉西側の旧農道下より多数の土器を発見し、ツボ１個・甕１個を復元する。（写真２）
昭和36年8月	上記ツボと甕を県文化財保護係へ持参鑑定をお願いした。
昭和37年2月	一本杉付近の水田より土錘１個、高杯１個を発掘する。同時に排水堀の断面に住居址を発見し実測をする。 住居址確認のため柳田敏司氏の現地視察を要請し、住居址を確認する。
昭和37年3月	大塚伴鹿氏を現地に案内し、住居址を認識していただく。
昭和37年8月	それまでの見田方遺跡の調査結果をまとめた報告書を越谷市文化財調査委員会に提出する。 以後、市立図書館長木村さん等と発掘調査につき情報を集める。 また、県内外の遺跡発掘現場を廻り、手統、方法、予算、知識、技術を学び着々と発掘調査の準備を整える。
昭和40年	大相模地区耕地整理は進捗すると共に各水田での土抜きが盛んとなる。
昭和41年6月	それまでの調査結果を、埼玉県地域研究会全体会に於て「大相模地区の古代住居址」として研究発表する。
昭和41年8月	県立不動岡高校金井教諭の現地視察を迎え、発掘調査に向けて意見を交換する。
昭和41年9月	不動岡高校金井教諭、川越高校小泉教諭、資源研究所中村所員らと共に越谷市教育長に面会し、「見田方遺跡の緊急発掘調査の必要性」なる意見書を提出した。その際、具体的に「発掘調査団の構成」につき意見を交換する。
昭和41年10月	土地所有者の「発掘同意書」を取まとめ「発掘許可申請書」を文部省・埼玉県に提出。
昭和41年11月	越谷市長大塚伴鹿等市首脳および市議員多数の現地視察を行い案内説明をする。

昭和41年12月16日	「見田方遺跡発掘調査委員会」「見田方遺跡発掘調査団」「見田方遺跡発掘協力委員会」を結成し発足させる。 以後、発掘に向け、役割分担、発掘用具の手配、宿泊施設、食事、用具の購入、車輌の借上、仮設テント・便所の設営、接待、予算、保管所等および地元中学校、高校への発掘参加への要望書等の送付等を行う。
昭和41年12月25日 〜 同　12月30日	乾田期を利用して第一次発掘。
昭和42年3月20日 〜 同　3月30日	第二次発掘　地水に悩まされる。

なお、土器の復元作業は、昭和44年大沢小学校準備室にて大学生、高校生の応援を得て行い「発掘調査報告書」は昭和45年より市役所等にて作製し、昭和46年3月「見田方遺跡発掘調査報告書」を発行した。

5．発掘調査の成果

(1) 住居址　2

(2) 遺　構　5

(3) 土　器

　土師器

　須恵器

(4) 漁　具

　土　玉

　土　錘

　軽　石

(5) 祭　具

　滑石製双孔円盤

　有孔滑石製品

　滑石製管玉

(6) 木　器

　盆・機織枠？

(7) 用　材

　住居用柱

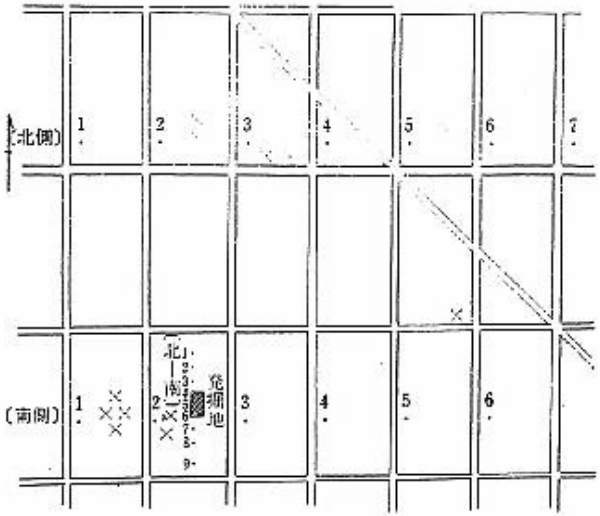
　板

(8) 木の実

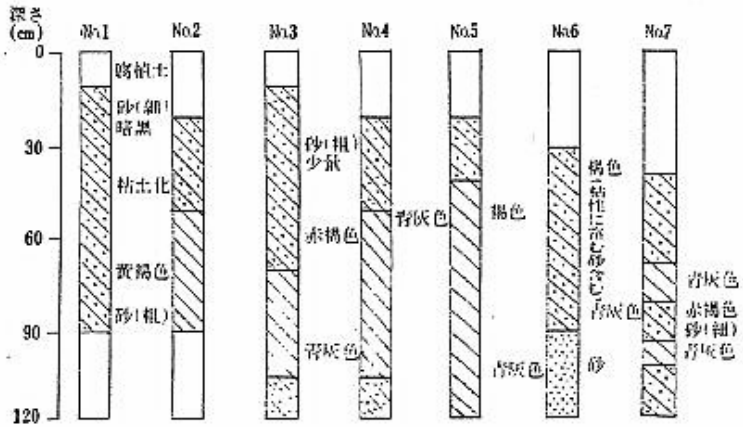
　桃の実

(9) 炭

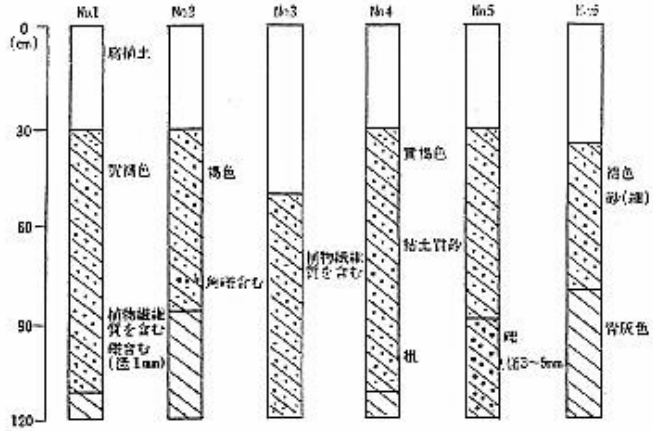
　土器内で炭化



第 4 図　見田方遺跡付近ボーリング地点



第 5 図　見田方遺跡付近のボーリング柱状図(北側)



第 6 図　ボーリング柱状図(南側)

見田方遺跡付近での最初の土器発見は昭和35年２月である。当時は住居址の存在は確認されないで，翌36年にいたり排水溝を約１ｍの深さに掘った時確認したものである。その時の資料によれば，住居址堆積の深さは25，28，37，30，50cmであって，その基層はいづれも砂質粘土であった。住居址を離れたところは，有機物の含有が多く見られた。第４図，第５図，第６図，第７図は発掘後の43年夏および44年秋のボーリング調査結果の土壌分析である。これから推定すれば，住居址の多くは砂質粘土，砂礫粘土にあり，比較的地盤がしっかりした自然堤防上に存在していることが解った。以上の資料等から考えられることは，古い河川等による土砂の堆積によって形成された比較的高い（自然堤防など），地盤の固いところに集落ができたものと推定できよう。この古い河川等の確認は今後の調査研究にまつほかない。

Ⅲ　発掘経過　第9図参照（図版1の1・2）

1．第一次発掘調査（昭和41年12月25日～30日）

12月25日

午前中、宿舎になっている越谷市福祉会館に集合した発掘調査団40名は、打合せをすませ直ちに現地に向う。一部は現地本部の建設にかかり、他は「一本杉」付近小排水溝の西側水田（30cm程土抜きしていた）に4m間隔に、北より1、2、3……、東よりA、B、C……、とトレンチを入れる。遺跡は土抜きで破壊又は取りさられ、1AGの黒色土層は小排水溝に傾斜、8BGに僅かの黒色土層をみた外は少数の土器片のみ、1CGから7EGに向って流路跡が見られたので、4CGにおいて2mの深さに掘り下げる。流路近くの東側の6CGに潮木の株の密生が見られた。

12月26日

作業開始8時40分。今日から小排水溝東側の水田にトレンチを入れる。溝から東へイロハ……、溝にそって北より1、2、3……とグリットを設定。各グリット共トまで1m²の坪掘りを行なう、午前10時、1ロGから完型の鬼高式壺を掘りあて凱歌があがる。8ロGの－30cmから土錘1個。

略

12月29日

51イGは黒色土層がほぼ円形に広がっていることを確認。1～3Gにかけての黒色土は中央部が一段と落ち込み、4本の用材が出土。黒色土の上部にうすく火山灰が見られた。5イGから土器片。6イGに礫数個。6ロGから杯2個。8ハGは黒色土が二層にわかれ、小木片が介在していた。9ロGから土錘1個（球状）、杭1本。10ロGに高杯脚部、木片、土器片。10ハGは炉跡と思われる近くに粗一掴みを発見。

12月30日

土器の整理と実測に一日を費す。夕闇の中帰途につく。

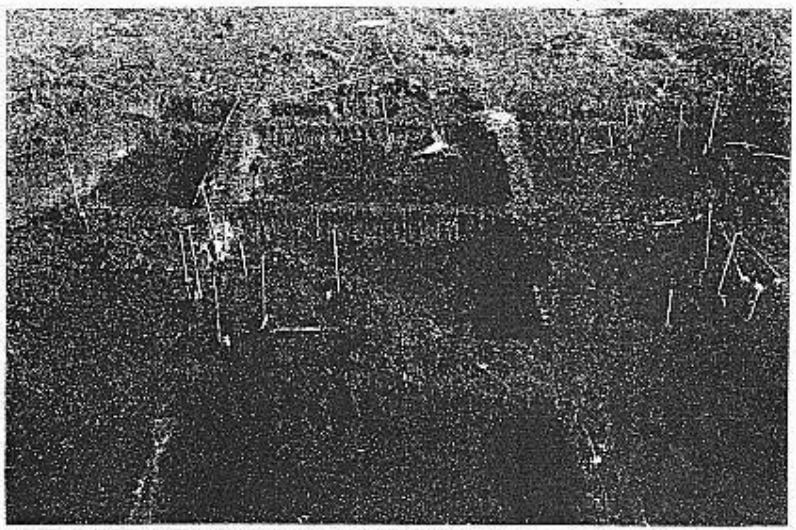
当初の計画では本日までであったが、作業の完結をみなかった。

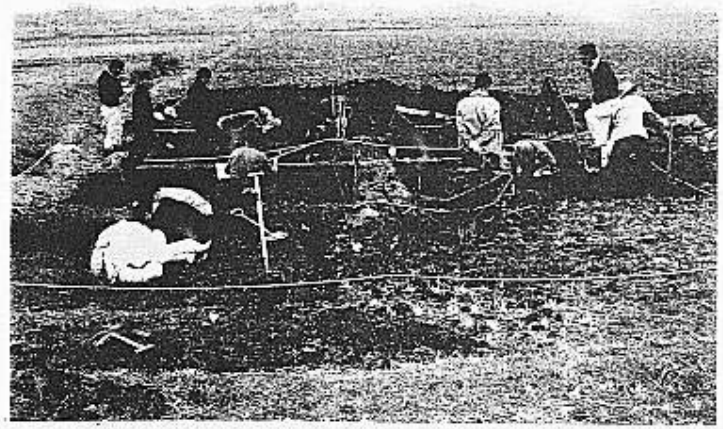
整理調査（昭和42年1月3日～7日）

墓の発掘は意外に手間どり整理作業は年を越すことになった。その結果1G～3Gにかけての住居址から用材9本が発見され、南東の隅に貯蔵穴が発見された。

3ハG北壁－30cmから木器が発見され、10ロG南壁の下部から大きな板が露出するにおよび、発掘調査地を南へ拡張する必要が生じて来た。

図版1　第1次、第2次発掘状況





2．第2次発掘調査（昭和42年3月20～30日）

二次発掘の必要性については、一次発掘の終りに述べた。二次発掘は3月20日より一次発掘団とほぼ同じメンバーにより行なう。今回は3月になり既に地下水の湧出がみられ、バチカル等の設置により排水しなければ作業は進められないという低湿地帯特有の障害に突当った。その上、天候不順で雨にもあい発掘団は悩んこの悪戦苦闘の連続であった。

3月20日　晴

第一次発掘同様グリット方式をとり、一次調査の南に10～13Gを設定し、午前10時より発掘調査を始める。10ロGは一次の際発掘され覆土されていたところで再発掘となる。

10イG　耕作土の排土

表土下30cmに第一次黒色土層、その上から鬼高式土器の破片、須恵器の破片数個、有孔玉を出土。

3月22日　雨

殆んど作業はできない。今までの整理やミーティングに終始する。

3月23日　曇時々晴

昨日来の雨で各グリットとも湛水し、バチカルや可搬消防ポンプを使用して排水作業を行なう。その間にも湧水激しく、作業は困難をきわめた。作業のできないグリットもあり、配置転換を行な

3月24日　晴

朝のうち排水作業。各グリット掘下げと実測。

10イG　午前、排水作業。午後、全体的に第6層まで掘り下げ。土師器片3個出土。

11イG　午前、排水作業。午後、全体的に第5層まで掘り下げ。木片1個、西壁より75cmで土師器底部1個を出土。

12ロG　排水作業の後、第2黒色土層を出す。この層はグリットの東側にて消滅。午後から土器群の周囲にある管玉（前掲）の実測。管玉3個紛失したらしい。下に灰褐色の粘土層があり、その中に大きな土器片を発見。

13ロG　第4黒色土は褐色土を含み、4～6cmの厚み。その下に0.2cmの粘土層。第5黒色土層は0.5～1cmの厚み。

3月25日　晴

10イG　排水作業後、第6層の排土作業後各地点のレベルの測量に入る。

10ロG　午前、第4層の土器群の20分の1測量。午後、南西にある木材の全貌を掘む。板状であった。柱と思われる木材は傾きが土壌のゆるみで甘くなった。北東隅に水はけ用の穴を掘るが、すぐに溢れて作業難行。

11イG　排水作業の後、水かい出しの二つのピット内の第7黒色土層の続きを見るためトレンチを入れる。西＝A、北＝Bとする。Aは第7層まで表土から73cm、Bは54cmとレベルが違う。

3月26日　晴

湧水激しく、朝のうちのグリットも排水作業。

10イG　レベル測量。11イG、10ロG、西の排水溝の三方向に落ち込んでいる。須恵器破片3個、土師器破片7個。東壁の北端に炭化物、東壁のセクションをとる。

10ロG　午前中、バケツリレーで水のかい出し、午後10イGとの境界の土手を薄くし、住居址の炭化面を追う。そこで木片の炭化物と土師器破片数点を発掘。東側に長い炭化木片が2本あった。

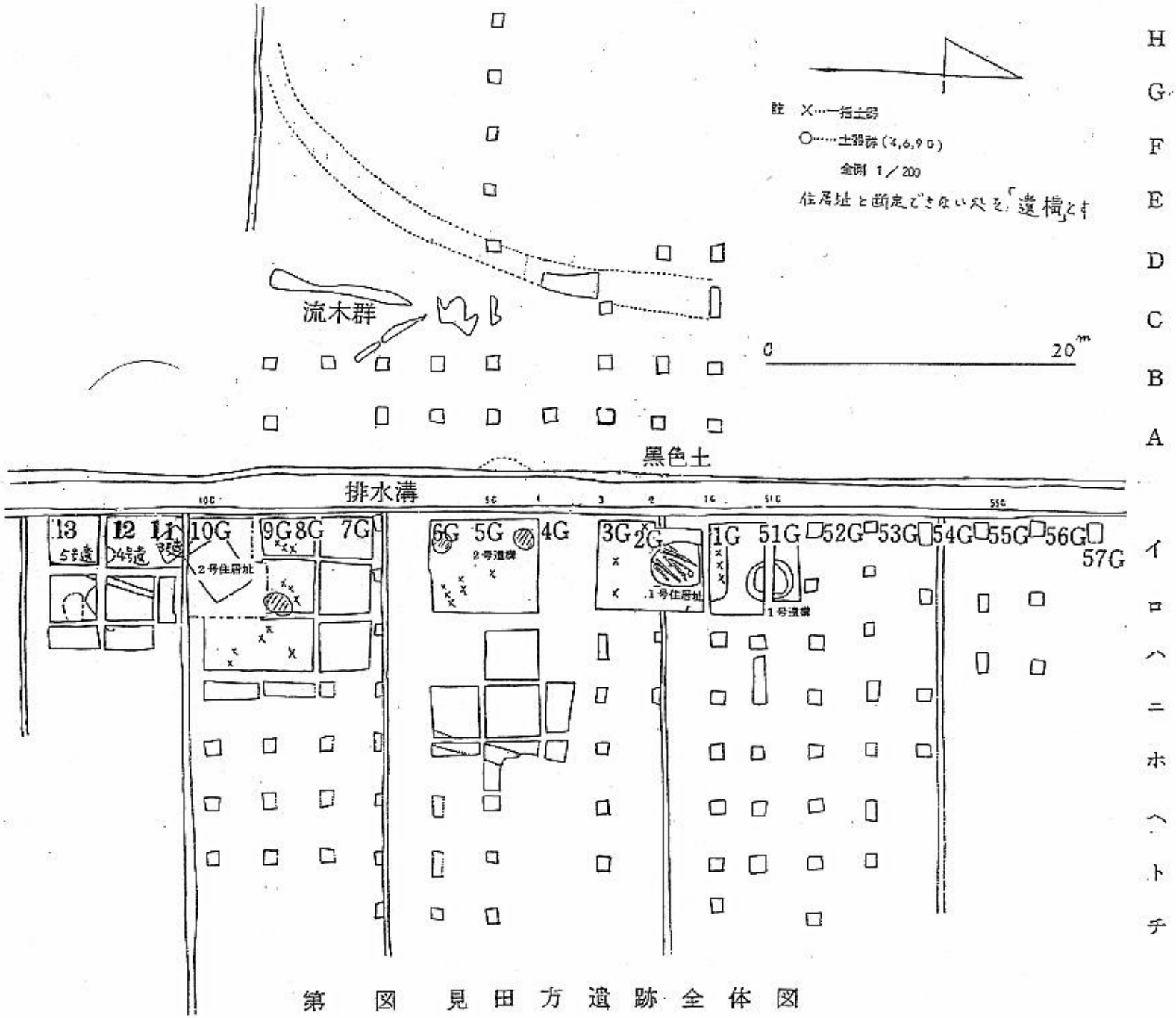
11イG　10イG側のセクションとりと、その土手の一部を取払う。

11ロG　第4層の黒色土を排土したところ、多数の土器片が出土。

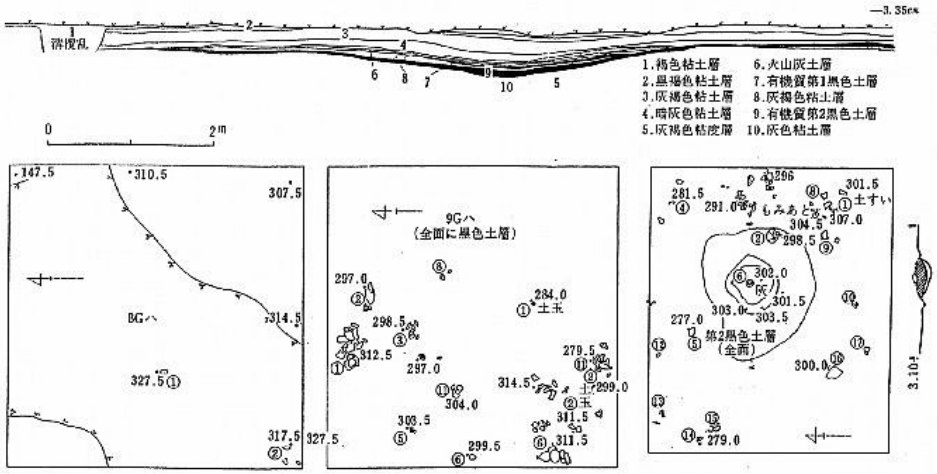
12イG　午前中、排水作業。後に北壁のセクションをとる。11イGとの境を一部取除く。

略

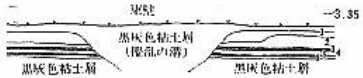
地水に悩まされた二次発掘

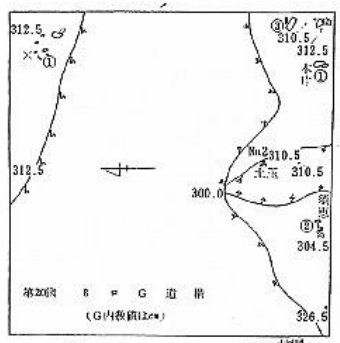

註 X…一括土器
○……土器群(4,6,9G)
縮尺 1/200
住居址と断定できない処を「遺構」とす
0
20m
流木群
黒色土
排水溝
13
5号遺
12
4号遺
11
10G
9G
8G
7G
6G
5G
4G
3G
2G
1G
51G
52G
53G
54G
55G
56G
57G
2号住居址
2号遺構
1号住居址
1号遺構
H
G
F
E
D
C
B
A
イ
ロ
ハ
ニ
ホ
ヘ
ト
チ

第　図　見田方遺跡全体図

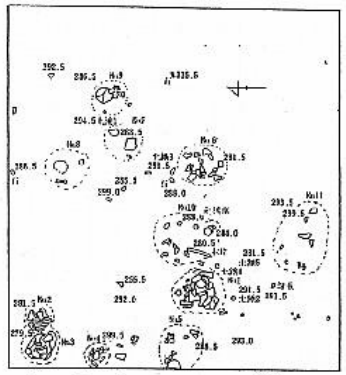


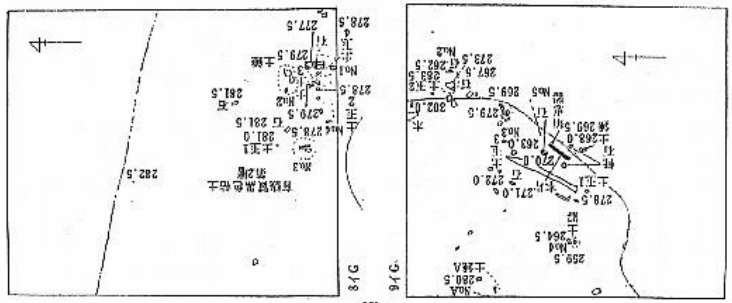
第21図　8ハG、9ハG、10ハG遺構　(G内数値は cm)





第20図　8ヘG遺構
(G内数値は cm)





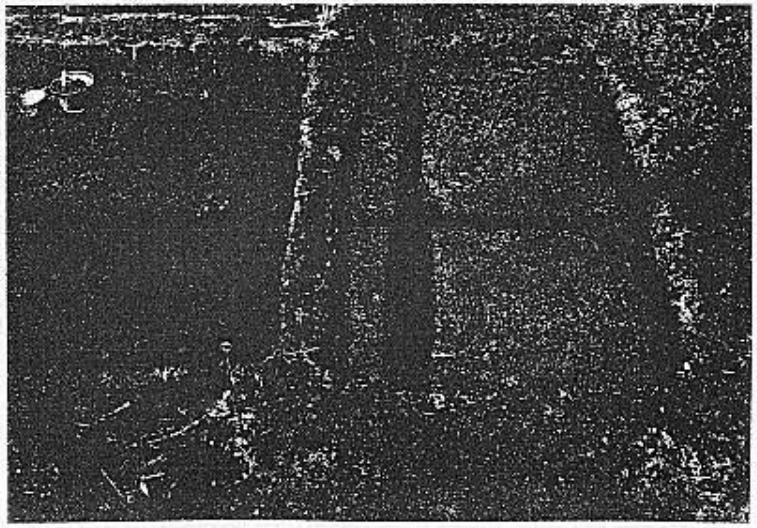
第19図　8ハG、9ハG遺構図
(G内数値は cm)

Ⅳ　住居址と遺構

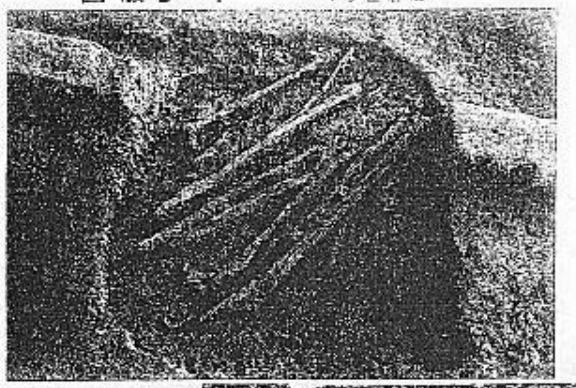
1．1号住居址（第10図）（図版2の1，3）

これは第1次調査において，形態を完全に把握できた唯一の遺構である。2イ，2ロ，3イ，3ロの4グリットにわたって発見された。平面形は不整ではあるが隅丸長方形で長軸はほぼ南北をさしている。大きさは南北3.2m，東西2.8m，深さ30cmである。北東隅がやや大きく外に向かってふくらんでいるが，南東隅はその逆に内側に向かって張り出している。壁の大半は垂直に近く切りこまれているが，南壁の東半はゆるやかな傾斜をなしている。壁溝は見い出せなかった。床面は灰青色粘土であり，概して南西部が高く，北東部は低い。踏み固められた跡は見い出せなかった。柱穴と思われるピットは住居址内中央寄りに1個所発見されたのみである。径12cm，深さ10cmの小さなもので黒色土が若干つまっていた。北東寄りには63×55cmの楕円形で，約4cmの厚さをもつ焼土があり，これが炉とみられる。南東隅には南北85cm，東西96cm，床面よりの深さ25cmのピットがあり上部には黒色土，下部には褐色土が堆積していた。遺物は出土しなかったが，これは貯蔵穴と推定される。

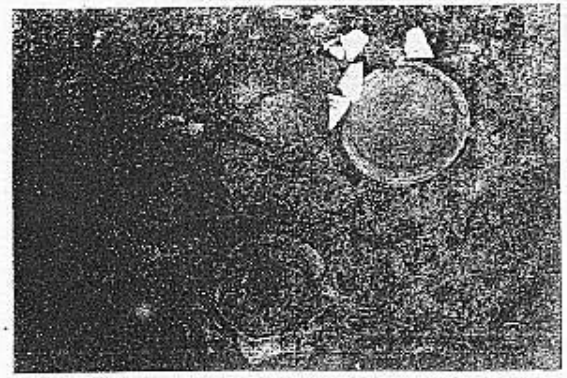
床面上4～10cmの高さには，長さ29～60cmの木材が，いずれも北東一南西の方向を指して，床面全体をおおうように平行に倒れていた。長さも太さも不揃えではあるが，炉，柱穴，貯蔵穴などをおおっていた。さらに木材により割れたのではないかと思われるような土器片や，木材の上にのっている土器片などもあるので，これらの状態からみてこの木材はこの住居址の用材であろう。



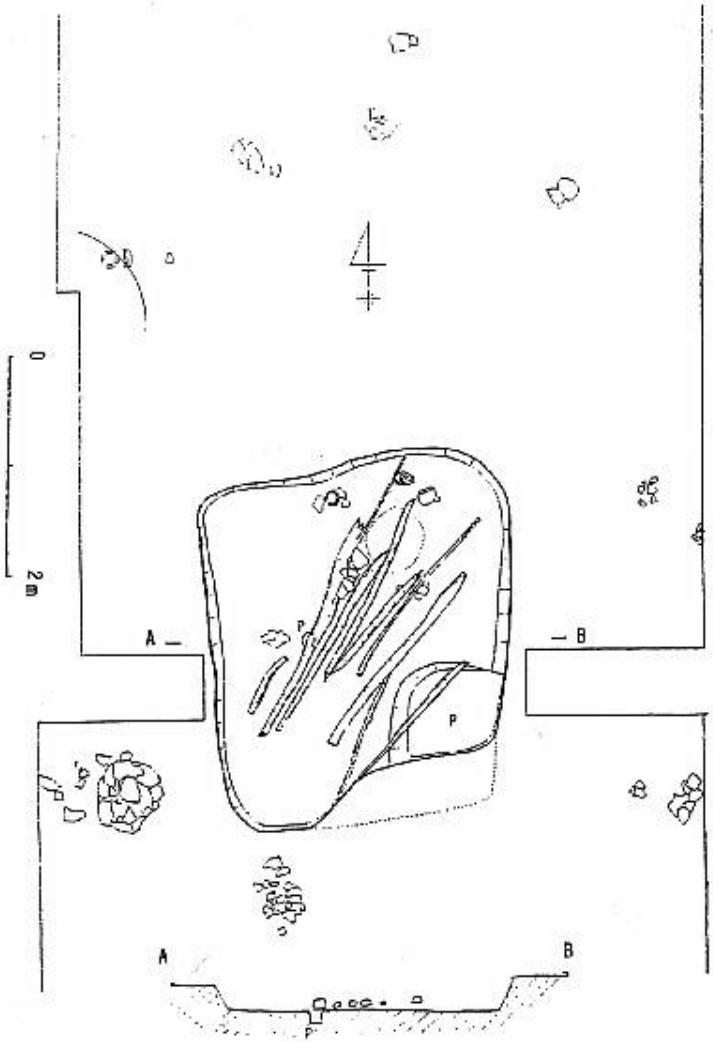
図版2－1　1号住居址



図版2－2

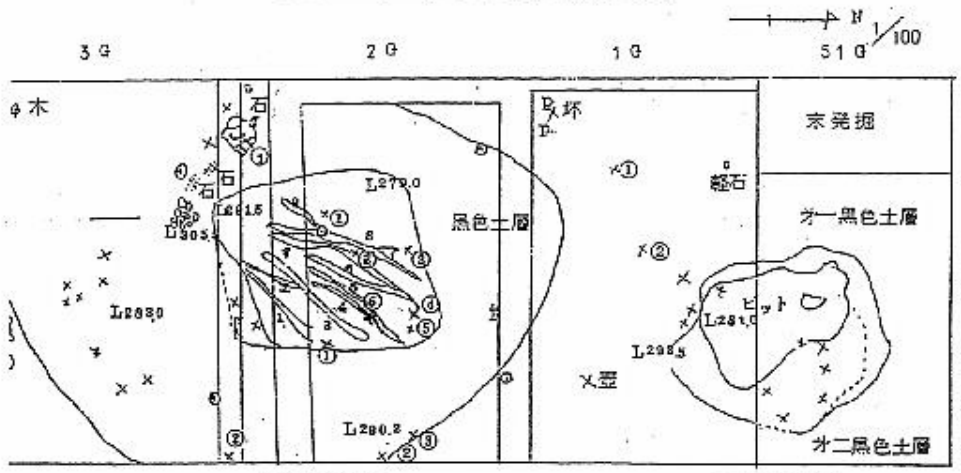


図版2－3



第10図　1号住居址実測図

見田方遺跡



1号住居址実測図　　1号遺構実測図

註
- ×……土器片
- ①……一括土器番号
- 1……木材番号　8本
- L……海抜

2. 2号住居址（第11図）（図版3の3，4の1.

10イGに主としてかかる有機質第6黒色土層を掘り込んで築かれた住居址で、その大きさは、3.7m×2.5mの隅丸方形で、床面にはカヤその他の建築用材が炭化した状態でかなり調密に存在していた。

とくに西壁南半分の部分には、壁の土止めに使用したと思われるカヤ、ワラなどの炭化物と共に、直径約4cmの炭化した丸太状の木材がほぼ並立した状態で認められた。

また南壁中央部に近い床面直上には、中央部の片側に切り込みのある板状の木材が炭化した状態で（幅20cm長さ約100cm）発見された。

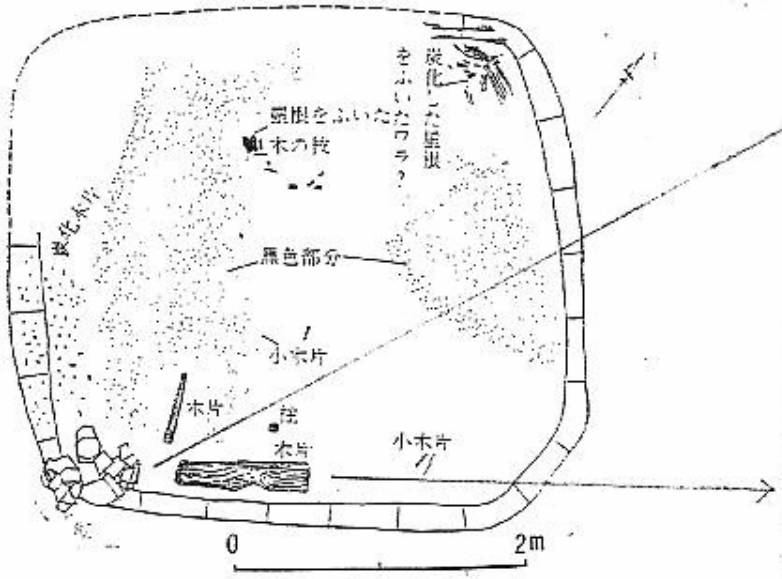
さらにそのすぐ北側で柱とみられる丸太状（径10cm）の用材が途中から折れ、直立した状態で発見された。

東北隅に近い北寄りの壁で焼土（径20cm）が少し認められた。

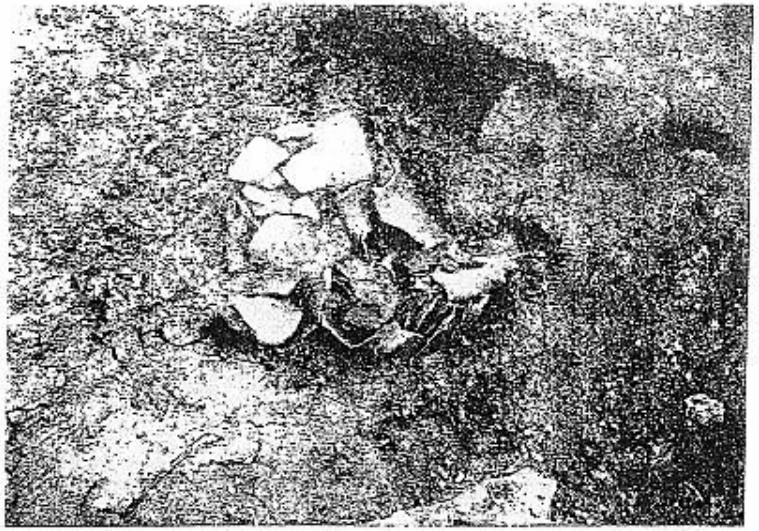
南西隅の床面直上から長甕形土器の完形品が3個体分が何れも口縁部を住居址内に向けて発見された。

住居址床面に密着して検出された建築用材は、全て床面の上と共に取り上げ、市教育委員会に保存されている。

これらの建築に関係する植物性の遺物は、おそらく洪水が襲い、厚い黒色粘土層の堆積に覆われたために、炭化した状態で残存したものと思われる。

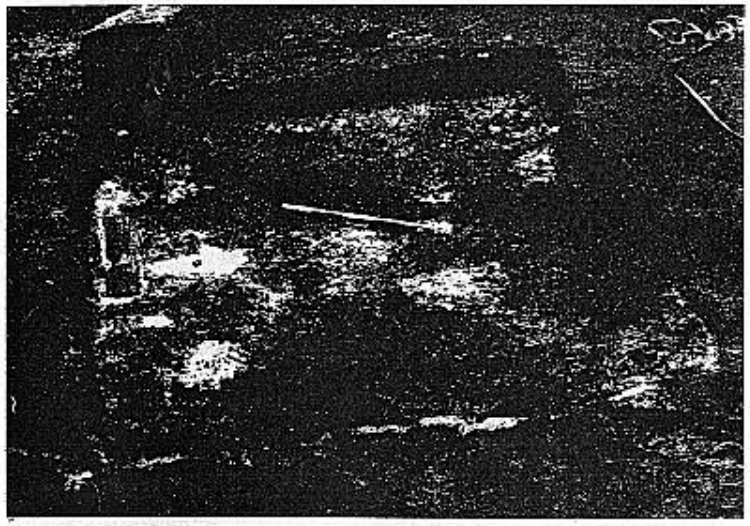


第11図　2号住居址実測図



図版 3－3

図版 4－1　　2号住居址



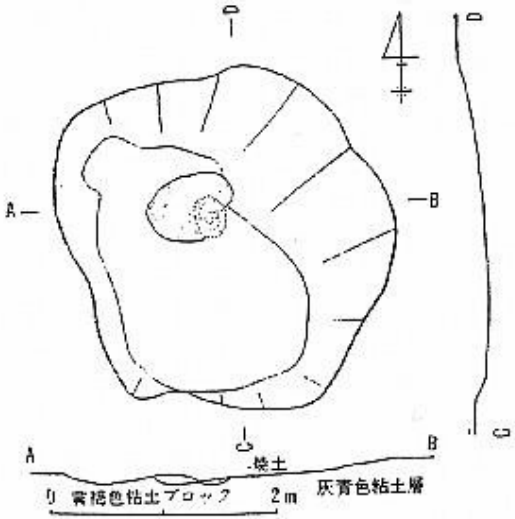
覆土と床面の土層は判然と見分けがつかず、たまたま竪穴住居址の炭化した建築用材の植物の存在によって区別することができた。しかし柱の位置については、柱材の残っていたもの以外は、覆土と床面の土が同一のため、その柱穴を明らかにすることはできなかった。従って柱の位置は実測図の柱材にもとづいて推定する以外に方法はないと考えられる。（小泉　功）

3. 1号遺構について（第12図）（図版2の2）

51イ，ロおよび1イ，ロの4グリットにまたがっている。南北3.4m，東西2.9m，深さ20cm程度の浅い落ちこみである。明確なプランはつかみえなかったので不整円形とでも呼んでおく。遺構は第1黒色土面から落ちこんでおり，第1および第2の黒色土層が周囲からはいりこんでいたが，遺構内部ではその範囲を明確にとらえることはできなかった。壁は殆んどなだらかに立ち上がっており，平坦な床面との区別もつけにくい。壁および底面に多少の凹凸はあるものの，全体として問題とする程のものではない。中央やや北東寄りに径20cmの焼土が厚さ約4cm堆積しており，その北から東側にかけて幅20～40cm，高さ10cmの黄褐色粘土ブロックがとりまいていた。このブロックは黒色土面上ではなく，灰青色粘土面上にあった。

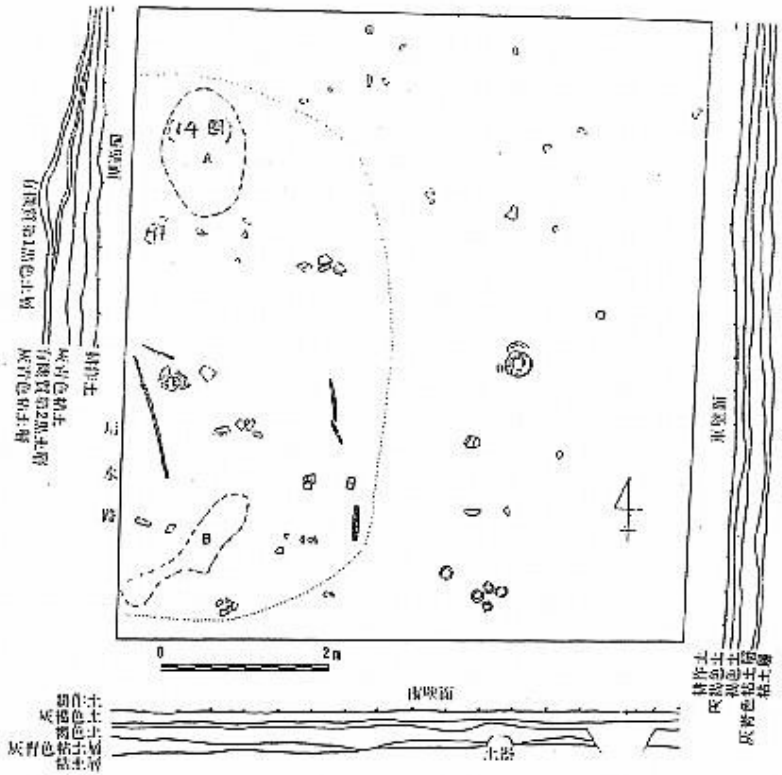
遺物は若干の土師器小破片が覆土中に見られたのみで，周囲からは甕形土器片および内面に腰を持つ坏などが出土しているので，遺構の時期は鬼高期と考えてよいだろう。

（坂本　彰）



第12図　1号遺構実測図

4. 2号遺構（第13，14，15図）（図版3の1，2）

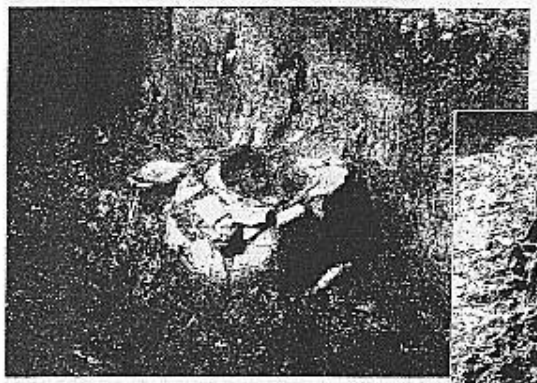


第13図　2号遺構実測図

5イG，6イGにあらわれた落ちこみを2号遺構とする。ここも5イ，5ロ，6イ，6ロの4グリットにあらわれた有機質黒色土を追って，全部を掘り上げたものである。範囲は東北7m，東西3mの半円形で，深さは約50cmであるが，有機質黒色土は西に接する排水路の断面および排水路をこえた西側の5A，6Aのグリットにもあらわれており，これをも計算に入れると東西約8mの円形となる。セクションが示すように灰褐色土層の下は灰青色粘土層と有機質黒色土層が互層をなしている。5イ，6イのグリットは2つの有機質黒色土層が全面にあり，5イGでは第3黒色土層の存在も明らかにされたのであるが，その範囲をとらえることはできなかった。

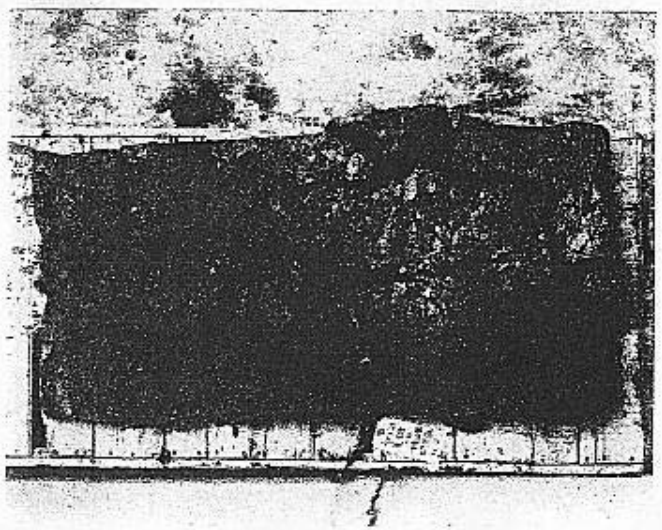
落ちこみはなだらかな傾斜をもって中央部に向かい擂鉢状にくぼんでいる。1号遺構と同様な状態であったが焼土や炭などは発見できなかった。また顕著な凹凸も見あたらなかった。

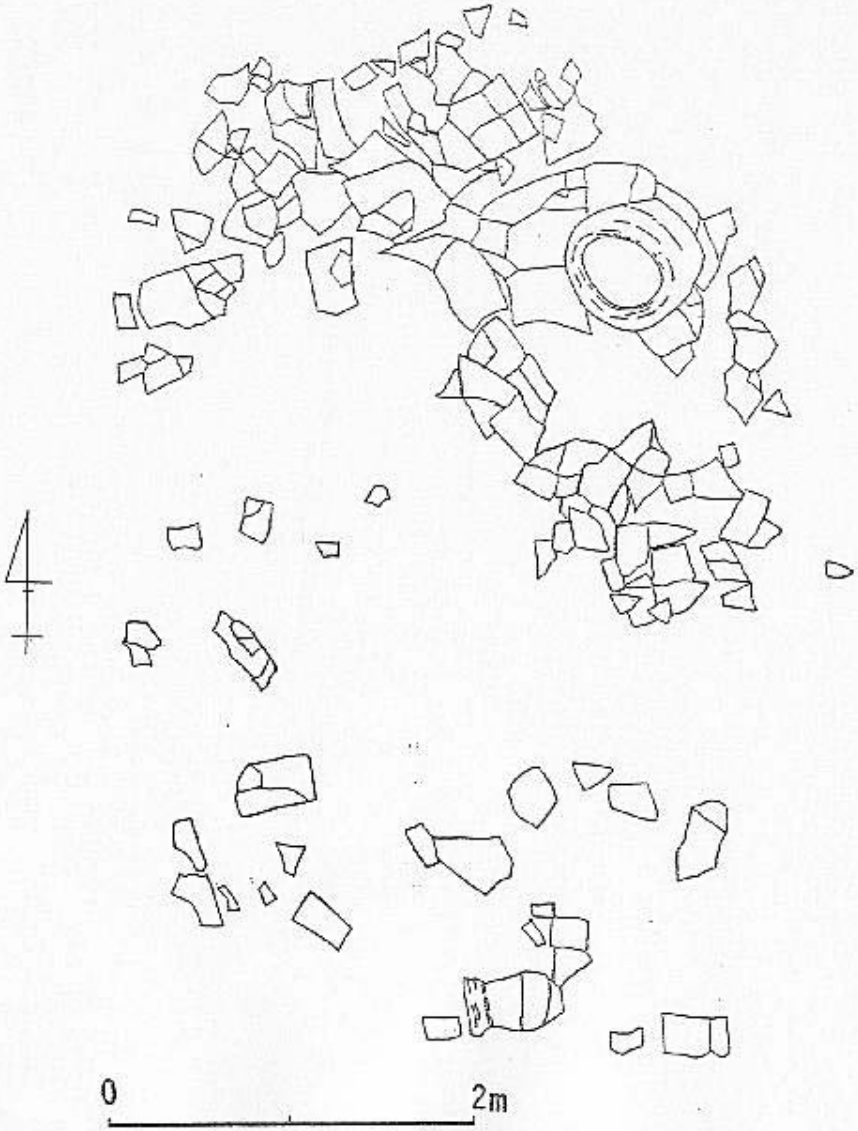
図版 3 -1　　土器出土状況



図版 3 -2

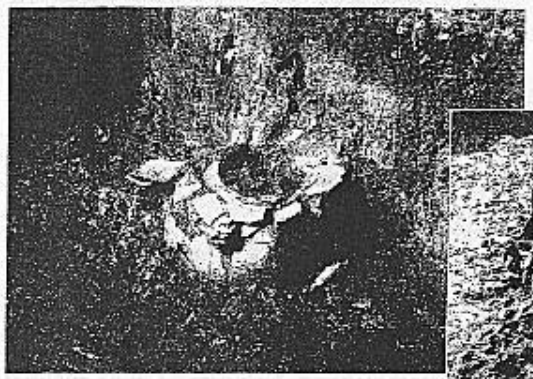
図版 7　　2号住居址、3号遺構





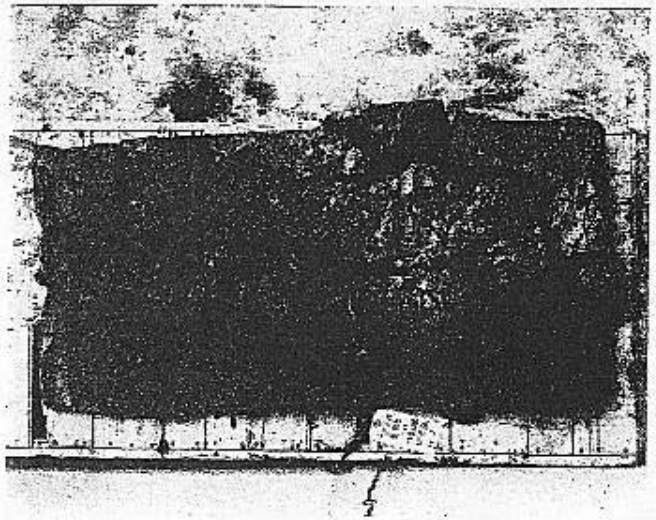
第 14 図　2号遺構内土器出土状態 A

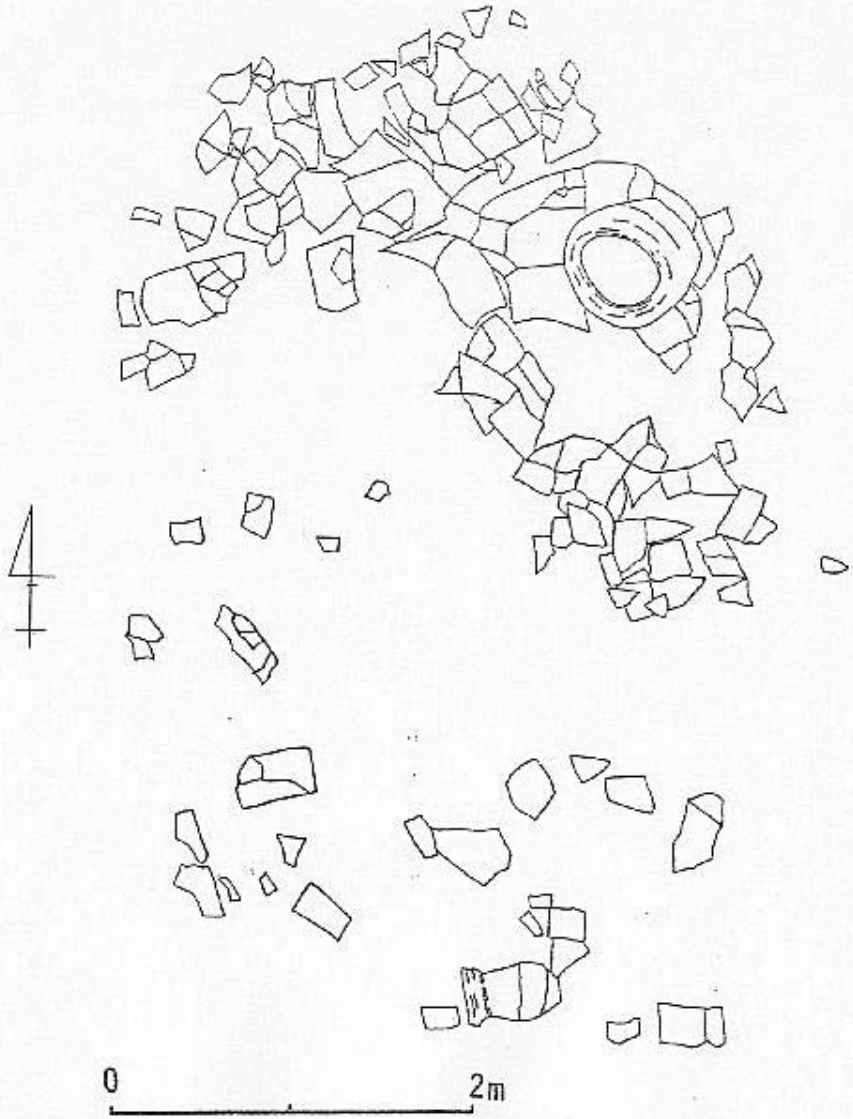
図版 3 -1　　土器出土状況



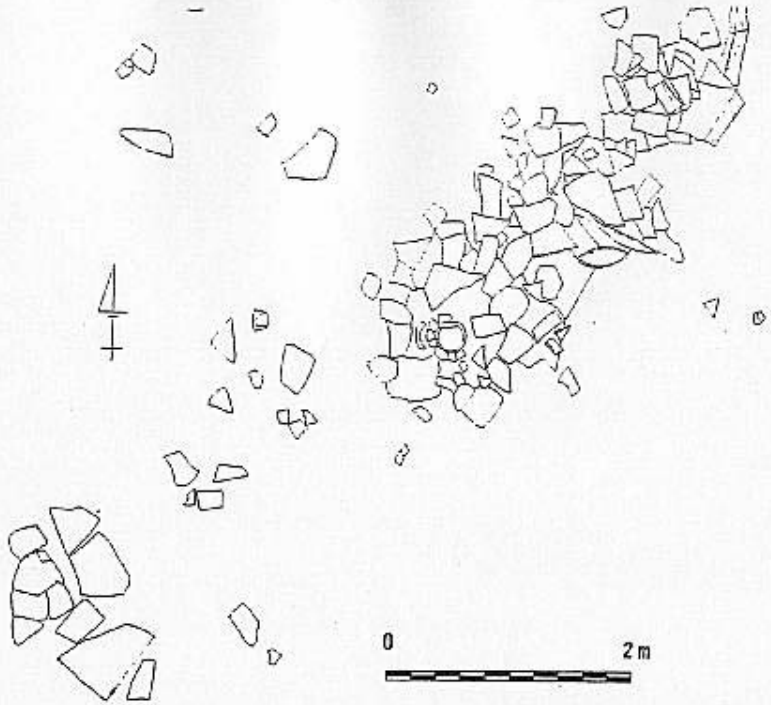
図版 3 -2

図版 7　　2号住居址、3号遺構





第 14 図　2号遺構内土器出土状態 A



第15図　2号遺構内土器出土状態B

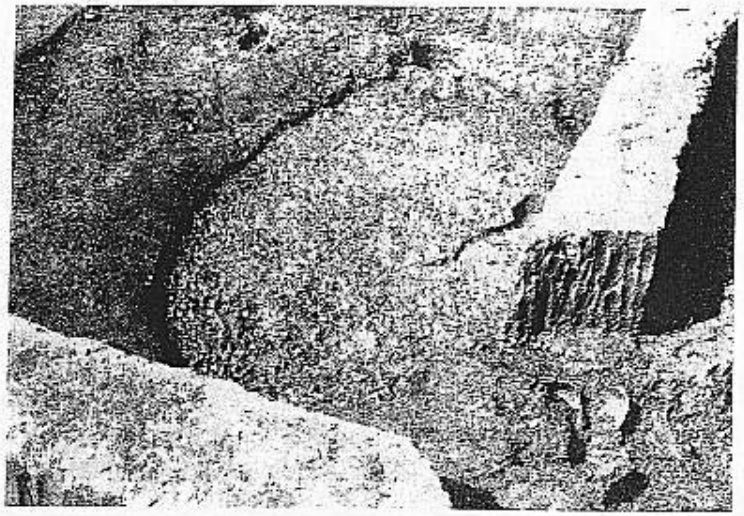
遺物は5イGでは有機質第1黒色土層上を北西から南東へ（A図）6イGでは第2黒色土層上を南西から北東に（B図）向かって投げこまれたと思われるような土器群が発見されている。いづれも南東、北東の方がレベルが低く、土器には大形破片が多かった。これらは明らかにまとまって捨てられたものであろう。5イG北東隅では完形の坏が逆さの状態で発見されている。しかし付近に遺構とみられるものは見当たらず、また他の遺物もなく、全く単独で出土している。

6イGの有機質第2黒色土層では長さ35cmから150cmの5本の木材が発見されている。そのうち1本は東西を向いていたが、他はすべて南北方向に倒れていた。6ロGの南西部では4個の坏がまとまって出土し、さらに西側にも同じような形の坏が1個発見されている。いづれも有機質第1黒色土層上にあり、倒れているものはなく、すべて置かれたように位置していたと推定される。また5ロGと6ロGの境界の部分では、壺形土器が直立した状態で発見されている。しかし、ここでもこの土器と関連する遺構などを見い出すことはできなかった。なお、この壺形土器は発掘後極少破片となってしまい復元することはできなかった。

5.　3号遺構（図版7の2）

当遺構は11イGに属し、第4黒色粘土層から第6黒色粘土層まで掘り込んで、第7黒色粘土層を床面とする隅丸方形で、擂鉢状を呈する。この擂鉢状遺構の床面の大きさは約2m、第4黒色粘土層と第7黒色粘土層の比高は9cmほどで、若干の土器片を北西部で検出したのみである。この遺構を住居址として認定する有力な遺構や遺物は発見されなかった。

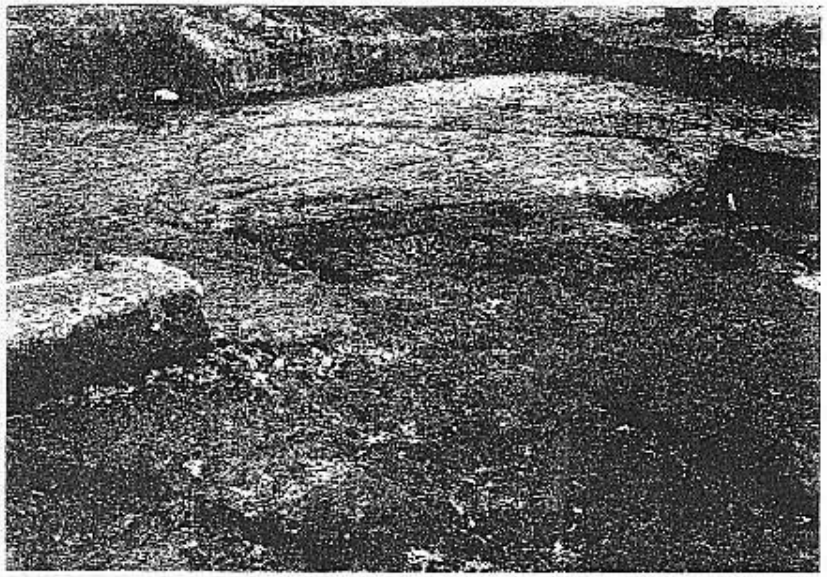
しかし、第4黒色粘土層を切り込んだ擂鉢状を有する何らかの遺構であることはほぼまちがいないと思われる。（小泉　功）

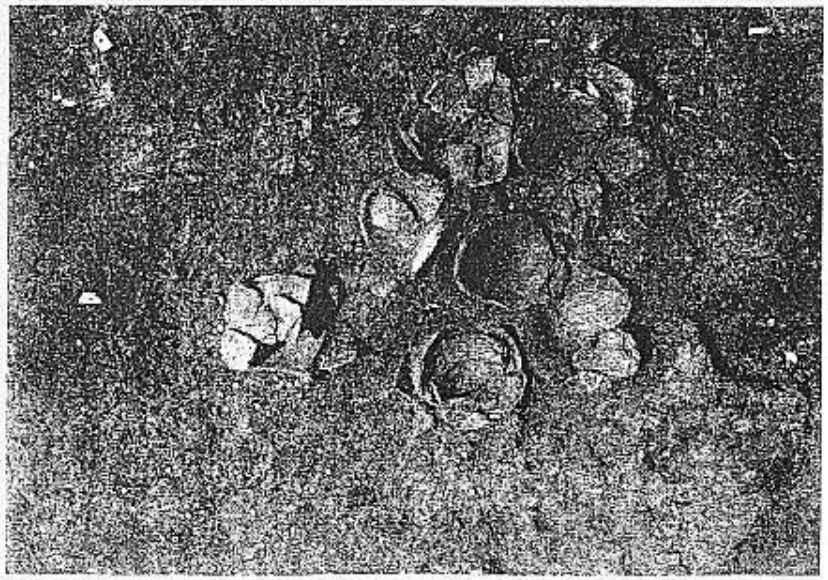


図版　7の2

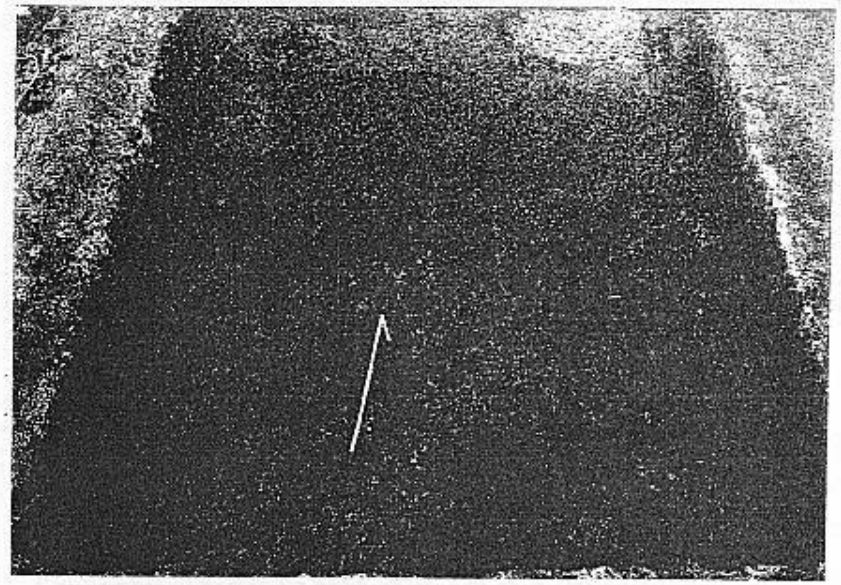
6. 4号遺構、5号遺構　(図版8の1.2、9の1.2)

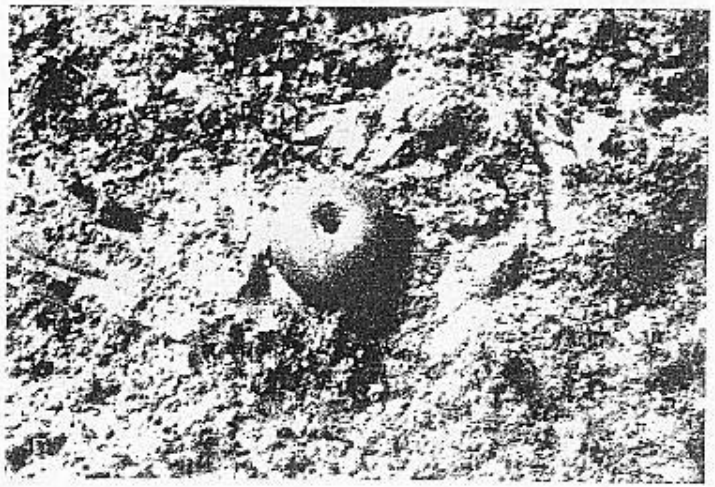
図版8　4号遺構





図版9-1　5号遺構





図版9-2

V 遺　　物

1 土　　器

1 イG出土土器

壺形土器（第23図1）（図版12の3）

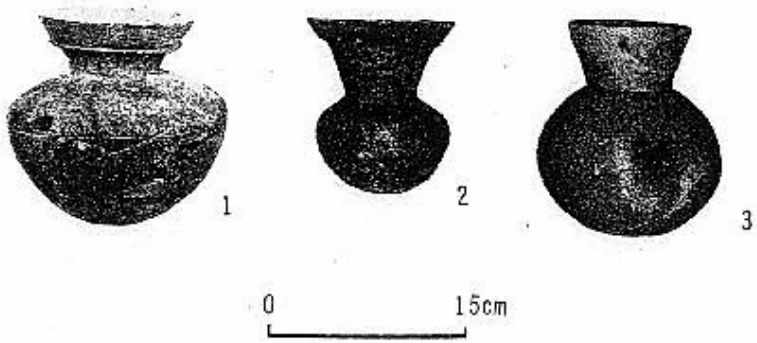
口径9㎝高16㎝胴部最大径13.1㎝。口縁部内外面には、丁寧な横なでが認められ、胴部外面はヘラ削りが施こされている。胎土には砂粒を含み、接合痕が二条認められる。第2黒色土層中出土。

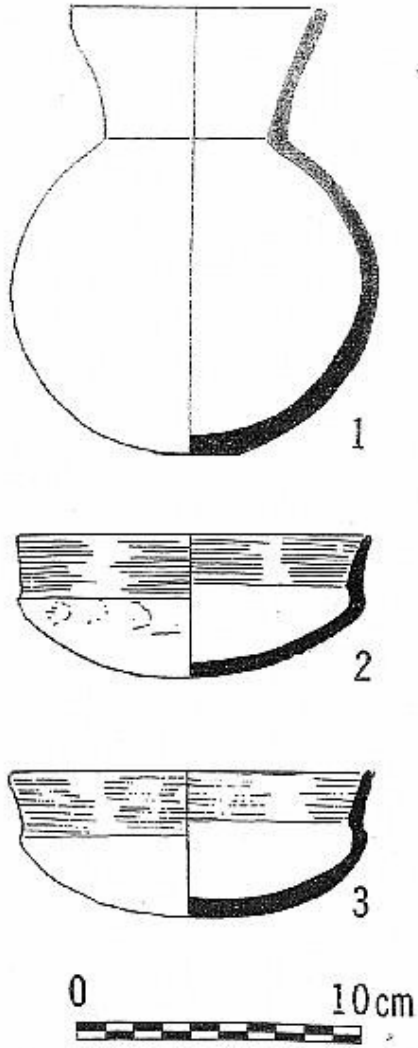
坏形土器（第23図2～5）（図版10の6・8・9）

ほんの少し外反する口縁と、その下に内外面とも明瞭な稜をもつ。口縁部内外面は横なでを加え稜より下の胴底部外面はヘラ削りを施しているが、この内面およびヘラ削りの上に何か調整があったかどうか不明。2は口径12.5㎝、高さ5.3㎝、細砂を含む。焼きはあまり良好ではない。3は口径12.7㎝、高さ5.3㎝、つなぎの砂は少なく、精選された土が用いられて、焼成もよい。

版 図 12

土器、須恵器



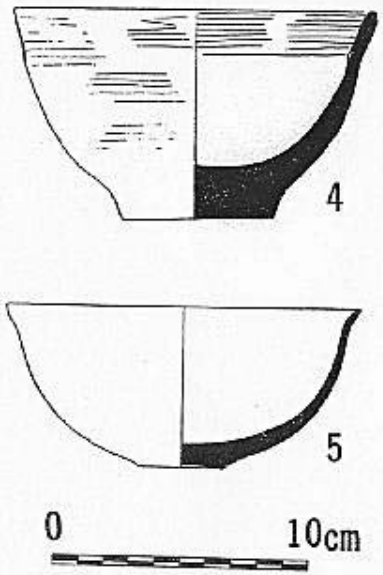


第23図　1 イ G 出 土 土 器

6ロG出土土器

鉢形土器（第28図4・5）

4は鉢形とすべきであろうか。平底で、厚い器肉で口縁部内外面横なでが施こされ、内面に稜が残る。胴外面はヘラ整形。5はくぼんだ平底で、薄手の器壁につらなって、口縁端がわずかに外反し、内面に稜状のものができている。4は第2黒色土、5は第1黒色土出土。



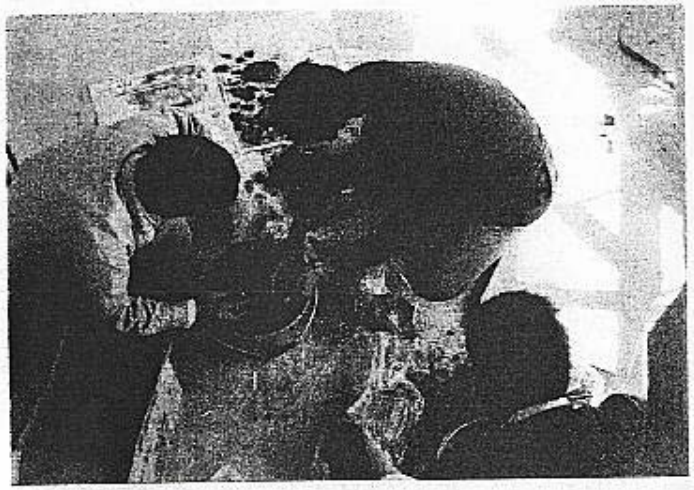
第28図　6ロG出土土器

6イG出土土器

高坏形土器（第27図8）

脚部のみ1点。短い脚部は、ずんぐりとして八の開く形で、ヘラ、指などの調整痕が認められる。砂がやや多く、灰褐色を呈する。第2粘土層出土。

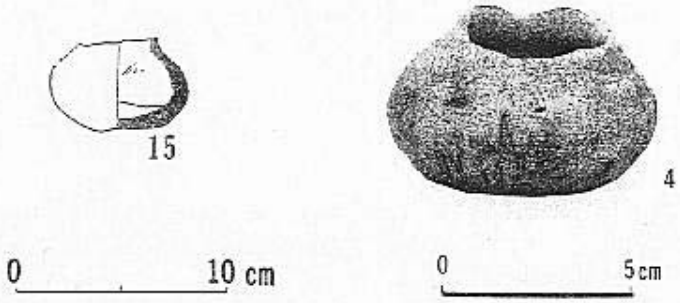
0　15cm



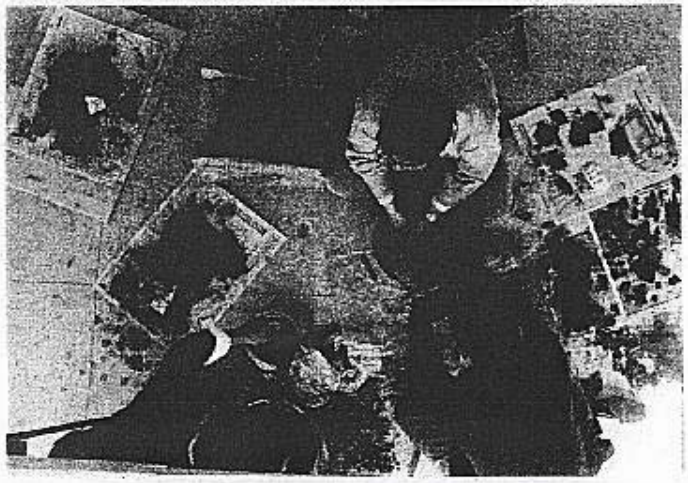
土器水洗い

手捏土器（第31図15）（図版12の４）

口径3.4cm、高さ4.2cmの粗雑な作りの土器である。粘土円板を底部とし、これに粘土を上げて胴部とし、その外面をヘラ削りし、口縁部を被なでしている。外面に紅彩の痕片が残っている。



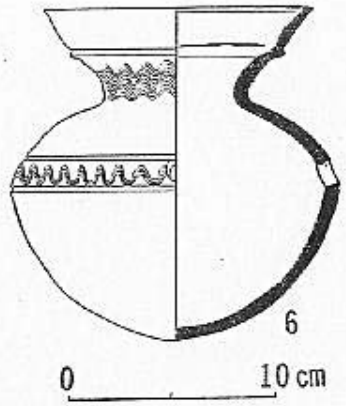
第31図　9ヰG出土土器の2



10イG出土土器

鉢形土器（第33図6）（図版12の１）

口頸部の大きく、長くない須恵器の鉢である。胴下半部、胴上半部、口頸部の３段造り。口縁部の下部に厚い筒を有し、頸部と二条の沈線に区画された胴中位に、それぞれ櫛目描きの波状文を配している。黄灰色の器面は肌荒れが目立つが、水道跡の土師器の年代を押えるのに格好な資料の一つである。３ともに第５黒色土層上部から出土。



第33図　10イG出土土器

10ロG出土土器

甑形土器（第34図4・5）（図版11の5）

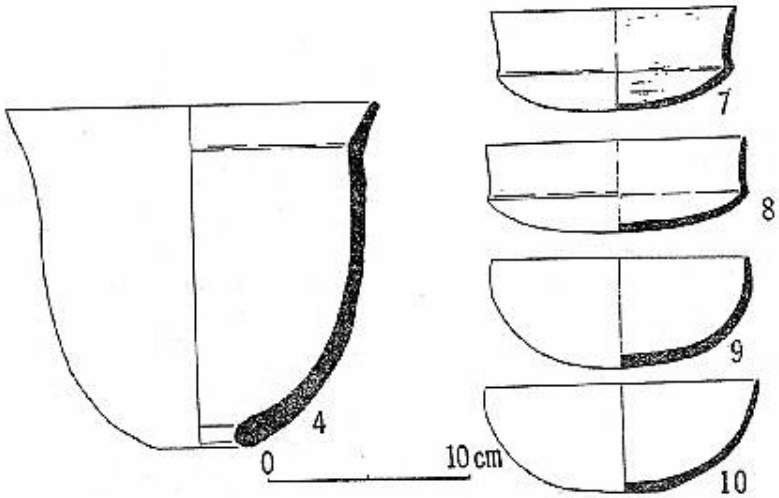
4は口径18.5cm，高さ17.2cm，丸味をもってすぼまる底部には，ヘラで，半孔を穿つ。胴部内をヘラで，口縁部内外面を磨なでし，胴部外面をヘラ削りしている。頸部に弱い段をもつ。5は口径15.5cm，[illegible]砂を多く含んで，焼成良好の土器で赤褐色を呈する。ともに，形の復元に属する。

坏形土器（第34図7・8）

外面に段をもって屈曲する口縁部が付きれている。7にはススの付着が認められ，8は砂以外の[illegible]を胎土中に含む。

鉢形土器（第34図9・10）

半球形を呈し，9は口縁部が若干内反り気味である。10は器壁が薄い。



第34図　10ロG出土土器

図版11

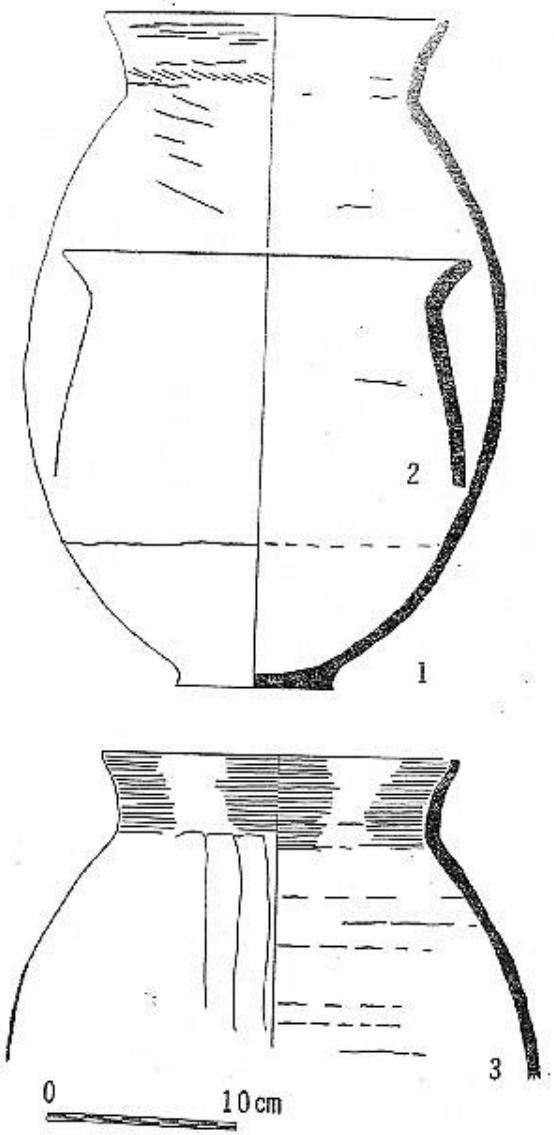
11イG出土土器（第37図）

1・2・3の壺形土器はいずれも第2次調査第1号住居址より出土したものである。

壺形土器（第37図1～3

（図版12の5）

0　20cm



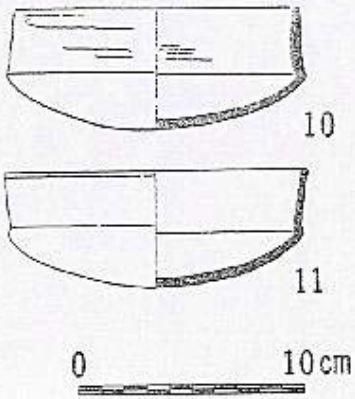
第37図　11イG出土土器の1

12イ・ロG出土土器

坏形土器（第40図　10・11）

口縁部が直立するもの（10）、外開するもの（　11）の違いはあるが、口縁部端なで、胴底部ヘラ削り、胴部の稜など規を一つにする。10は口径12.4cm、高さ5.5cmで、内外面に紅彩を施す。

10・11は第2黒色土層より出土。



第40図　12イ・ロG出土土器の1

（不破岡高校生）

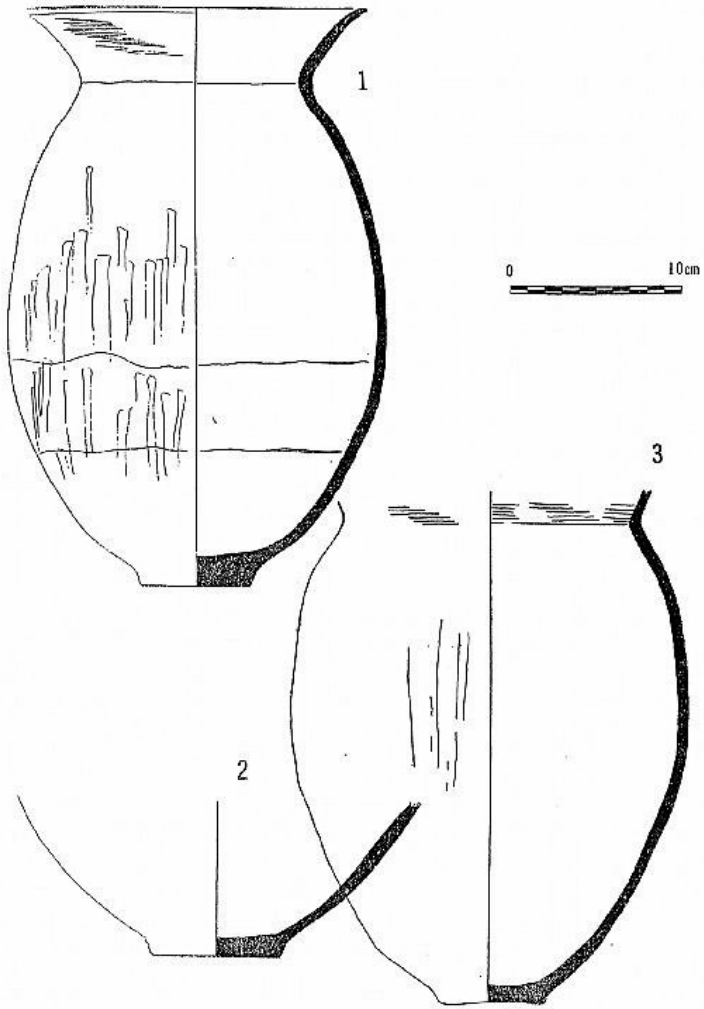
中村富男（資源科学研究所嘱託）

小泉　功（川越高校教諭）

13イG出土土器

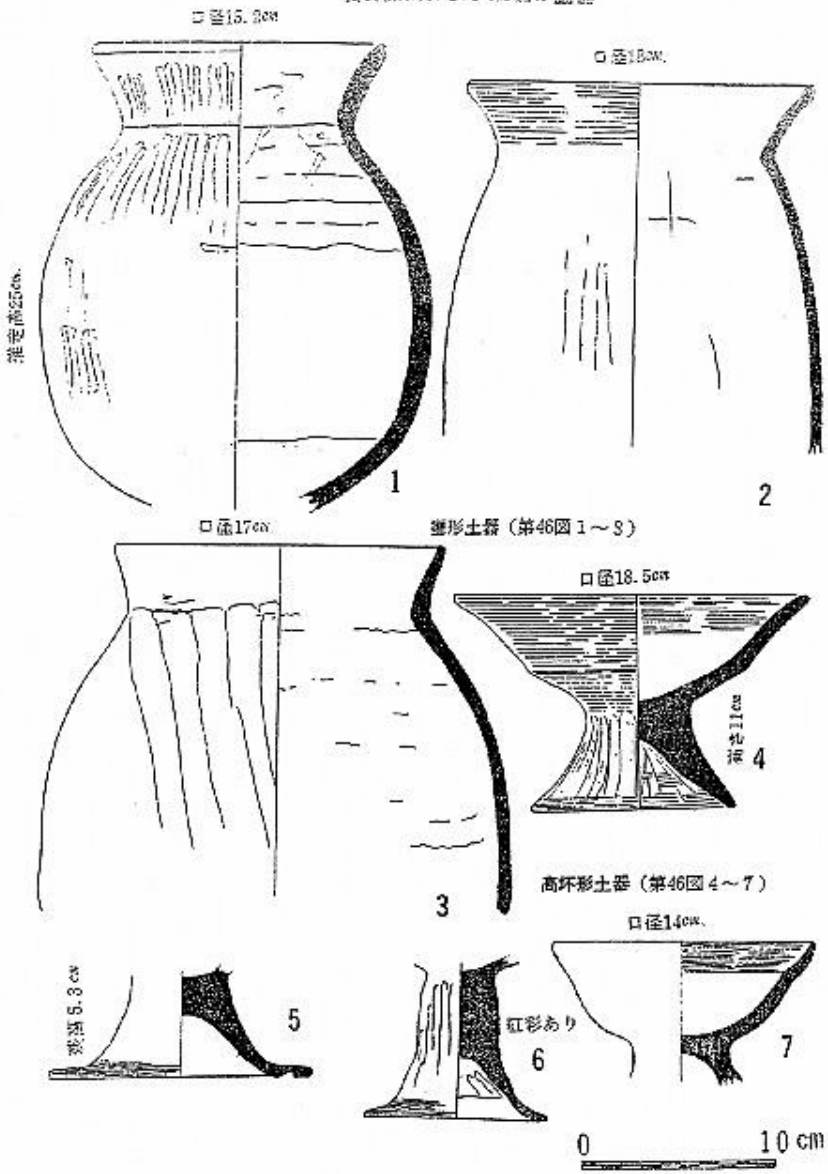
壺形土器（第43図1～3

第43図1は口径20cm、高さ34cm、胴部最大径は胴中位のやや下にあって22.4cm。口縁部は外反し、口唇部外面に稜をもつ。頸部、胴部に三条の接合痕が認められる。口縁部横なで、胴部ヘラ整形。胎土はやや砂を混じえるが良好で焼成もよく、堅緻で灰褐色を呈する。第5号遺構床面第2黒色土出土。第43図3は第43図1と同様の長胴の壺形土器。口縁部を欠くが、胴部最大径が、上の方にあって、やや肩が張る。内外面ともヘラ整形。焼成、胎土良好。灰褐色、5号遺構第2黒色土出土。

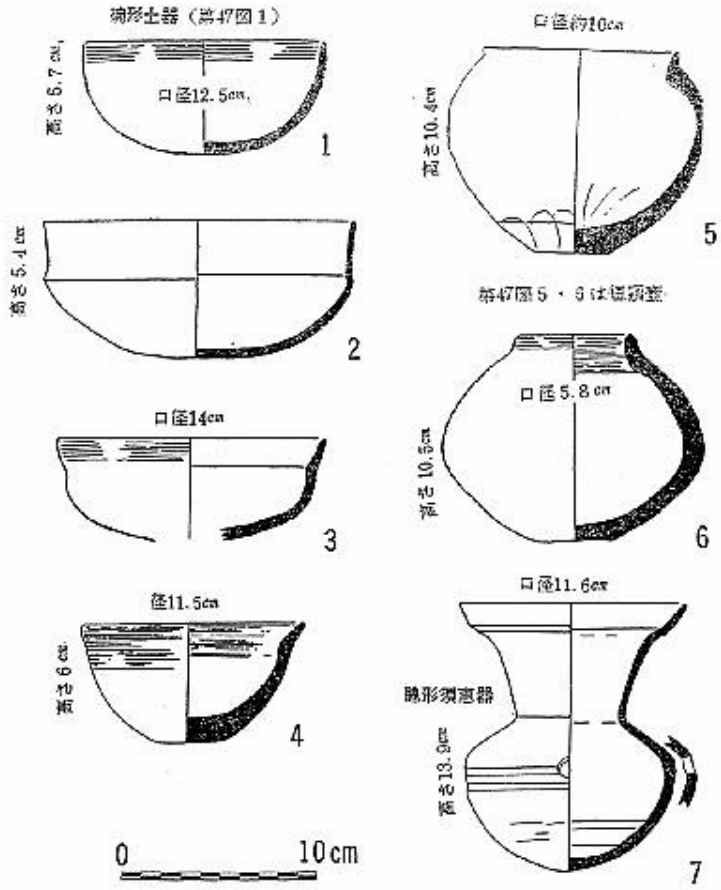


第42図　12ハG、13イG出土土器の1

表面採集および既掘の土器



第46図　表面採集および既掘の土器の1



第47図　表面採集および既掘の土器の2

略

2　出土土器に関する若干の問題

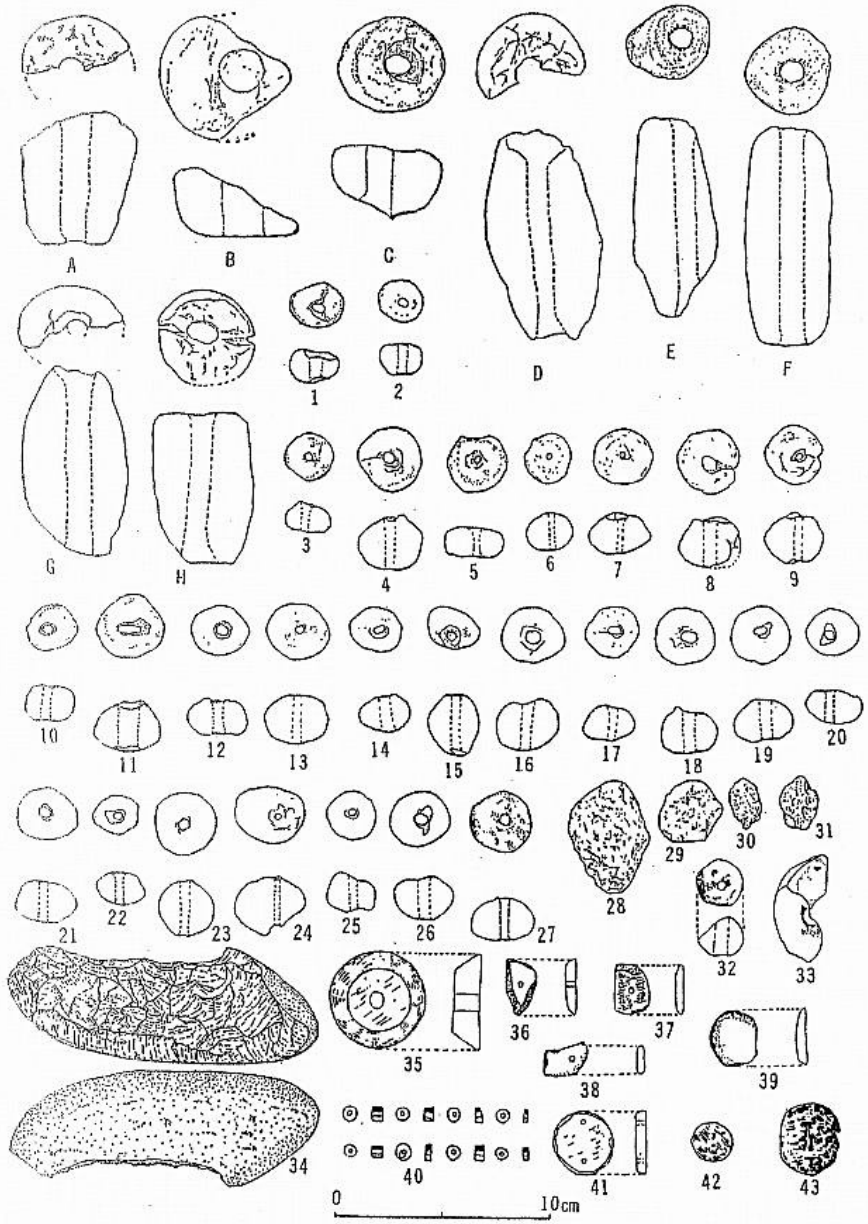
以上記述したところの本遺跡出土の土器は，鬼高式土師器の典型ということができる。六世紀から七世紀にかけて使用されたものである。

既述の通り，本遺跡は沖積地に形成された自然堤防状の微高地に立地した集落址であって，それゆえ，遺構の確認が技術的に困難をきわめ，同時に排棄された一括出土品として把握しうるものは決して多くない。層位的に出土品を分別するには今後に残された問題点もあって即座に解決しえない現状といえる。したがって若干のものを除いて，多くは，その型式から，土器の位置づけを行なわねばならぬであろう。ところが，そうするに際しても長時間粘質土中にあった土器は，しまりが弱くなって水洗の過程で粘土が溶けだし，観察に耐えうるものは極く限られてしまうのである。こうした困難にもかかわらず，出土土器を全体的にみると，そのすべてが南関東でいわれる鬼高式土器の範疇に含まれるものであることはほぼ誤りのないところであろう。須恵器の甕2点も，これと同時に使用されていたとみてよいように思われる。

甕形土器，甕形土器，甑形土器，鉢形土器，高坏形土器，坏形土器，瓶形土器，壺形土器よりなる出土土器は，量的にみて甕形土器と坏形土器がほとんどを占める。同時期の他遺跡でも認められるこの傾向は，甕形，甑形，鉢形，用形，高坏形土器の少なさ，すなわち，前代の和泉期との比較でいえば，これらの土器が意味を失いつつあったということでもある。なるほど甑形や鉢形は，和泉期における出土例は発掘された住居址数に比して少ないのであるから，特記するに値しないのかも知れないが，同様の比較を後代の奈良，平分期に及ぼして考えるならば，これらの時期の住居址群数に対する甑形土器の出土率というものは，和泉期に劣るのではあるまいか。高坏甑形土器の盛行は，和泉ないし鬼高期のはじめ頃にあり，鬼高期の終りから奈良期に衰退してしまうように思われるのであるが，こうした観点から本遺跡出土土器をみるとき，ほぼ鬼高期の中頃に位置づけることができるようである。このことは，前代の名残りとしての坩形土器が頸部が短かくなり調整が粗雑であるところから見て，この期に相応しいものといえる。甕形土器も，典型的な長胴の烏帽子形のものとともに，口頸部のクビレが少なく，ゆるやかな曲線を描いて立上るやや小型のものの存在など，こうした傾向の反映とみることができよう。

さて，こうして土師器を位置づけた際に奇異を感じさせるのは，2点の須恵器甕の存在である。すなわち甕のひとつは須恵器第二型式に属するものと思われるが，この事実は，須恵器第三型式と伴出したり，第三型式の須恵坏を模倣した土師坏をセット中に含む鬼高期中葉の単純な本遺跡から出土する事実と矛盾をきたすのである。この背反する二つの事実は，本遺跡の土師器を，須恵器第二型式に伴う鬼高期前葉の所産と理解するのではなく，一時期早く作られた甕がその後も使用され続けて，結局排棄されたのが鬼高期中葉であったと判断すべきではなかろうか。その根拠の一つとして，他のもう一つの甕は須恵器第三型式のやや古いものと推定されることが挙げられよう。須恵坏は継起的に新しいものが採用されていったのに対して，甕については新型式の登場にもかかわらず旧来のものが使用されていたという興味ある事実は，土師甕の中に須恵器のそれを模倣してまで代用していたという他遺跡で確認された事実を勘案するとき，深い意味をもっているように推察される。

さて，本遺跡を鬼高期中葉頃，すなわち六世紀後葉から七世紀前葉頃に比定しうるとするならば，その立地を改めて考えなおすことも必要となってくるのではあるまいか。縄文晩期をはじめとして，しばしば沖積地に集落の占地がみられるのである。そして応神・仁徳陵に典型的に示される土木技術の高度化と『古事記』『日本書紀』の池溝開発の記事とから，五世紀初頭以降の大規模な沖積地の開田を想定する見解が定説化しているのであるが，果してそれは正しいであろうか。『記紀』の池溝開発の記事に関する限り，そのほとんどは歴史的な事実の記述とは看做しえないのであって，信憑性のあるのは，前古記以降の記載であるらしい。その詳細は別に一考を要するが，池溝を媒介としての古墳築造開始は，確実な目安は七世紀初頭の推古朝であることは，本遺跡を考えるうえで無視しえないところとなるように思われる。要するに鬼高期には，台地の奥に集落が進出するとともに，新しく開墾された沖積地の近くの微高地に集落が新たに進出していったと想定されるのである。（浅野　敏）



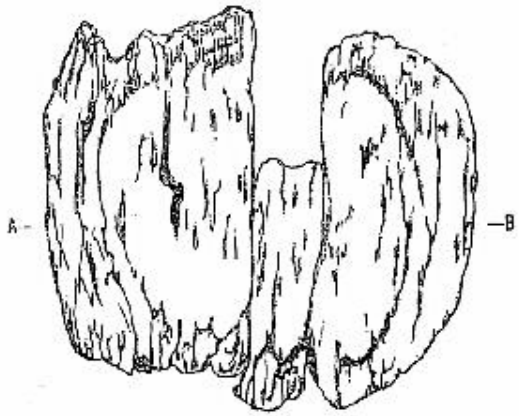
第5図　土錘、漁網用おもり、祭具及び石器
A～H　1～27　32～43　34、35（鈴金属）
柱石
28～31

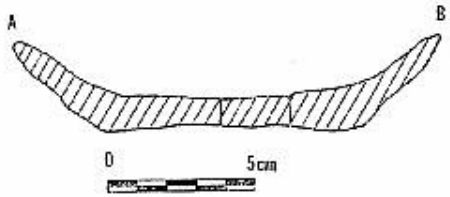
4　木製品

低湿地に存在する本遺跡の発掘に際しては、調査前から木製品の検出に大きな期待を抱いていたのであるが、結果は残念にもはずれてしまった。そして、明確に木製品と認めることができたのは次に述べる２点のみで、他には１号住居址および３号遺構、西側溝の周辺で出土した木材が見られるのみであった。

木製品No.1（第49図Ⅱ図版13の３）

これは９ＰＧの灰青色粘土層中より出土したもので、当初より３片に分かれており、中央部の半分は発見できなかった。大きさは15×14cm、中央部の厚さは1.2cmである。全体が非常に腐蝕しているため原形は正確にはわからない。しかし、縁辺部のカーブの具合から円形に近いものと推定できる。皿よりもむしろ浅い鉢といってよいだろう。内底は平坦であるが、外底は中心に向かってへこんでいるので、中心部が周辺に比べてうすくなっている。内周の径はほぼ10cmである。

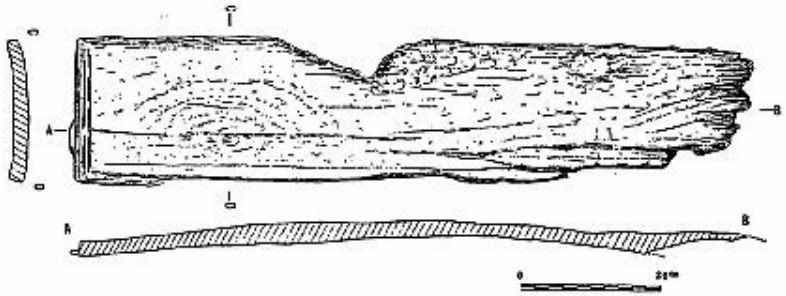




第49図　木　製　品　No.1

木製品　No.2（第50図）

これは２号住居址の床面直上、南側壁に接した位置より出土したもので、第２次調査の端緒となった。長さ90cm、巾20cm、厚さ３cm前後の板である。中央部上方の20×５cmの三角形の部分は、焼けたために欠けており、さらにここから右側の表面は一面にこげており、右端はちぎられたようになっている。一端は鋭い刃物で途中まで切断されており、残りをへし折る際に一部が残ってしまったらしい。表側は平らでよく削られているが、裏側は表にくらべると凹凸がある。また断面を見ると若干反っているがこれはこのように整形されたのではなく、発掘後にＰＥＧ液に浸した関係もあって反ってしまったらしい。なお、周辺部で左端以外に整形された跡はないが、長さはともかく巾はほぼ原形に近いであろう。裏側にはこげた跡は見えないので、この板は二次的に焼けた可能性が強いと思われる。（坂本　彰）



第50図　木　製　品　No.2

6　樹種

見田方遺跡の特徴の１つは各種用材の出土であろう。これら用材は、長い間の高湿度、覆土による酸素の補給及び光の遮断によって好気性細菌類の繁殖ができずに、今日まで地下に残ることができたわけである。しかし、ひとたび外気に触れるとその老化は驚くべき早さで進行する。したがって発掘後ＰＥＧ液による保存方法がとられたとはいえ、プレパラート作製までにはかなりの日数を経過しているため、顕微鏡写真による樹種の判定には困難があった。以下いくつかの標本比較による樹種をあげると

1　住居址床面の木片及び機織様（図版14の１・２）

樹種　ヤナギ科ヤナギ属あるいはドロノキ属

2　第１住居址の用材（図版14の３、15の１・２）

樹種　ヒノキ科ヒノキ属ヒノキあるいはサワラ

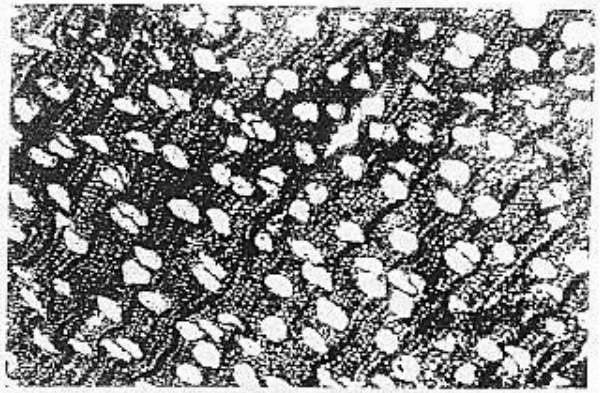
3　第２住居址の木片（図版15の３）

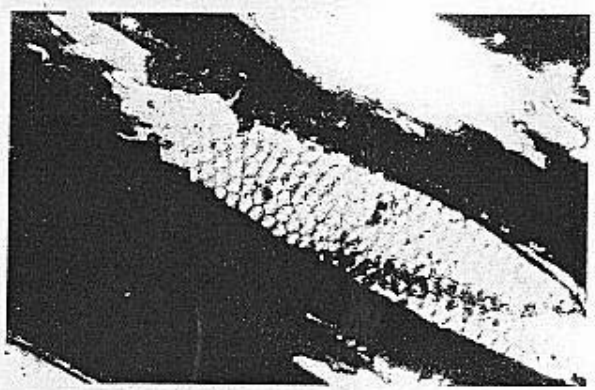
樹種　ブナ科コナラあるいはカシワ

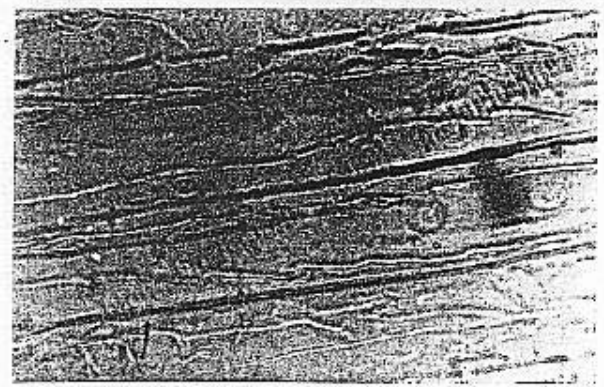
この調査には、越谷高校中沢教諭、国立博物館山内技官の手をわずらわしたことを付記します。

（有滝竜男）

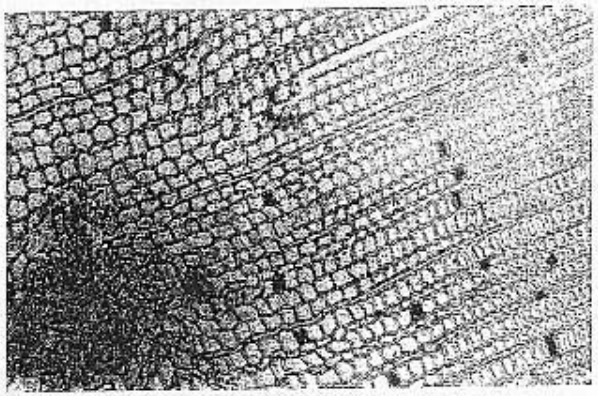
図版 14　　樹種顕微鏡写真

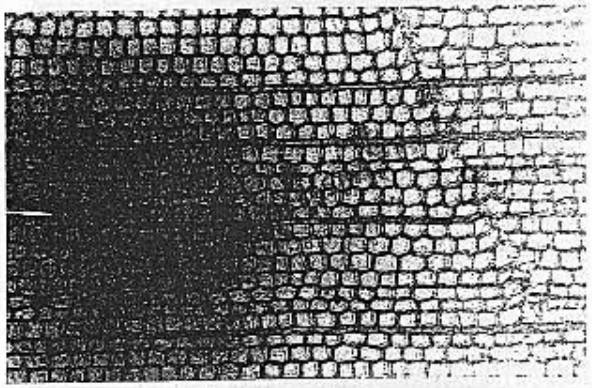






図版 15　　樹種顕微鏡写真





まとめ

時

調査の結果は後に述べられるように、確認された住居址の基盤をなす土層は何れも灰色粘土層で三角洲の堆積物とみなすべきものであった。おそらく縄文前期には今の利根川の南辺まで達していた奥東京湾が海退期にはいって、この付近に河口があった頃の堆積物であろう。さらに海退が続いてこの三角洲[6]が陸化すると共に、今の集落が乗っている自然堤防はその上に形成されたのである。現在土器の発見される水田が周辺の湿田と比べて乾き易いと云われ、さらに竪穴住居址が発見されることは、この陸化した三角洲の最高地に当時集落が営まれ、水田はさらに低い周辺の湿地に造られたことが想定される。海抜3mそこそこで掘ればすぐ水の溜まる現在の状況では竪穴住居はできそうもない。おそらく、より乾燥した状態が前提条件となるであろう。この推測に見合う一つのデータとして、弥生時代の海面が現在よりもむしろ低かったという、かってわれわれが明らかにした事実がある。これはこの時期を中心とする気候の寒冷化と関係あることも明らかにされてきたが、この見田方遺跡の例はその後の温暖化に伴う海面の上昇がまだ余り進まぬ一過程を示す事実と考えられる。[7][8] 今後沖積低地におけるこの種の遺跡の調査を積み重ねることによって、この過程はより詳細に辿られるであろうが、その第一着手であるところに今回の調査の一つの意味があった。

次に今回の発掘で現われた限りでの事実を中心とする集落の実態であるが、出土する土師器と須恵器の示す特徴から6世紀後半を中心とする時期が想定され、同じ時期に洪積台地に営まれた竪穴住居が隅丸の方形で、一方の壁にかまどを掘り込み、寄棟の屋根を支える柱の位置も歴然としているのに対して、第1、第2住居址ともに不整であり、かまどにかける形態として発達した長壁も見出されるのに炉で間に合せている点が注意をひく。またこれらは高くとも竪穴であることに間違いないが、地山の灰色粘土が掘り込まれず、その上面を竪穴住居と同じく有機物を含む第2黒色粘土層が覆い、その中に炭化した用材や壁体のカヤや葦が検出され、土器などの遺物が散乱し、平地住居と疑われるものも存在した。しかしそのうちの第1号遺構では間層を挟んで区別されるレベルの高い第1黒色粘土層からの落ち込みが認められているので、この土層の堆積が行われて後に掘られた竪穴であると考えられぬこともない。何れにせよこの種の黒色粘土層は洪水による埋没が度々起ったことを示し、第1・第2黒色粘土層に含まれる土器型式に大差のないことによっても知られるのである。

このような洪水の危険のある土地に住み、彼等はどんな生活を送ったのであろうか。先に触れたように周辺の湿地で水田を作ったことは想像するに難くない。今回の調査範囲でも西に向ってゆるやかに下る湿地帯など、この調査以後に開発されたイネの花粉分析による当時の水田面の有無を検討する必要を認めている。

さらにこの湿地はより深い沼や川に続いていたであろう。遺物としては数多く発見される紡錘形や丸形の土錘が、この水域で小規模な網漁が行なわれたことを推定させる。万葉集に「埼玉の津々いる船の風をいたみ網はためども[9]吾は絶えそね」とあるのは、このような川や沼を縫って船の往来も可能であったことを意味するのではなかろうか。

当時おそらく今の古利根や元荒川の本流に堆積した自然堤防は存在していたに違いない。それは前述した古墳の存在や15キロほど下流の同じ自然堤防上に埴輪を出す古墳がすでに造られていることでもわかる。したがって現在の集落が乗っているより危険の少ないこの自然堤防上に人が住みつく可能性は大きい。[10] 現に相似た条件にある奈良時代の越前国道守荘では、当時の田図の記載だけでなく、われわれはそれを発掘によって確認したのである。しかしここではその検討は今後の課題である。[11] 何れにせよこの大規模な自然堤防が形成され、川の主流が他に転じている間は、背後の集落を守る文字通りの「自然堤防」であったに違いない。しかし不時の災害を防ぎこの低地の集落や周辺の水田を経営するためには、人工の堤防や灌漑・排水の溝などの施設の造成が絶対に必要であろう。その技術的なまた体制的な条件が、弥生時代から古墳時代前期にかけて飛躍的に発展した経緯をここで繰り返さぬとしても、古墳時代後期のこの時点では、安閑紀にある武蔵国造家の内訌（AD531）の結果、大和勢力と結んだ北武蔵の勢力が南武蔵を圧して、行田市の埼玉古墳群に象徴されるような権力が確立していたのである。

荒川の扇状地の末端に営まれた広い条里制の開墾は、[12] この地方政権によって着手されたであろうし、このような政治権力による新しい耕地を求めての郡民の移植も盛んに行なわれた時代である。北武蔵の勢力圏に属するこの地域で、上述のような自然的条件を利用し、少なくとも利用せんとしてこの集落を造りえたのは、決して個々の住居址に住む個々の家族が恣意的になしうることではなく、集団的な労働力として地方権力によって組織されたものであろう。しかもなお自然の猛威は、この古代的な技術と労働組織による工事の達成を乗り越えてしばしば洪水の害を及ぼしたことは前述の通りである。ここで発見される祭祀の具としての石製模造品は、荒ぶる神の魂を鎮め、農作を天に祀る古代農民のはかない願望を象徴するものであろう。洪水によって荒廃しおそらくその後も引き続いた小海進によって地下水面も上昇した後背湿地の堆積面が再び開墾され、現在の美田に直接の系統をひく水田が造成されるのは、さらに数百年後の近世的な農業生産力の発展期を迎えてからである。自然堤防上の現在の集落に現存する板碑などに刻まれた年号が、その拠点となった集落の伝統の古さを示している。先に述べた福井平野の道守荘でも同じ動向が認められたことからも、この事実はこの地域における単なる偶発的なものとは思えぬのである。（和島誠一）

注

1 「埼玉県史」 P.332 1961年
2 同上
3 「千代田区史」 P.133 1960年
4 三友国五郎「関東地方の条里」 P.3 埼玉大学紀要第8巻社会科学編（歴史学、地理学）1959年
5 高時力 埼玉地域研究会研究紀要「大相模地区の古墳遺跡」1966年
6 和島誠一・松井建・長谷川厚治・岡本勇・塚田光・田中稔昭・中村喜男・小宮恒雄・鳥部隆・高橋建一・佐藤良「関東平野における縄文海進の最高水準について」P.100~113、資源科学研究所彙報第70号 1963年
7 和島誠一・麻生優・田中稔昭「北九州における後水期の海進海退について」資源科学研究所彙報第63号 1964年
8 赤 則雄「日本海沿岸砂丘」金沢大学日本海域研究所報告1969年
9 和島誠一「東京市内志村における原始時代竪穴の調査予報」考古学雑誌23巻9号
10 岩田慶治
11 大西青二「東大寺領道守庄遺跡調査概報」日本歴史第244号1968年9月号
12 横浜市史1巻 P.127

田園都市論に情熱を燃やした

首長生活十九年

——初代越谷市長大塚伴鹿氏遺稿集→

昭和37年　宮内庁埼玉鴨場にて

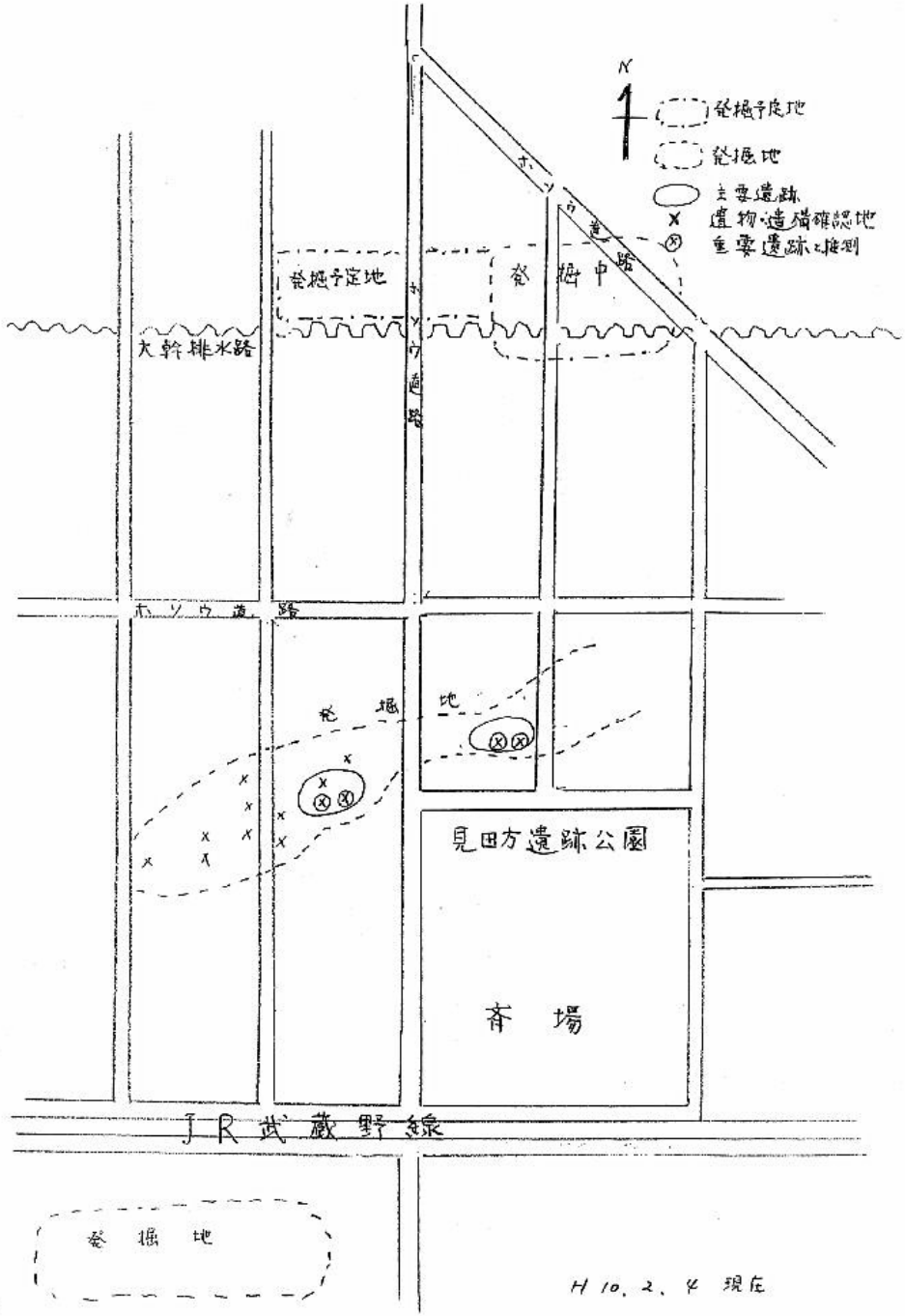
見田方（みたがた）遺跡と白子塙
——大野伊右エ門翁を偲ぶ——

私は少年の頃から、越ヶ谷で一番古い由緒のある旧蹟は、本町の"市神さま"と、私の生まれた越ヶ谷二丁目の"八幡さま"だと聞かされてきた。しかしその後、御殿町にれっきとした鎌倉時代の板碑が残存しているのを知って、越ヶ谷の歴史は鎌倉時代を若干さかのぼるものと漠然と考えるようになった。

ところで、町村合併後の町長になって、元出羽村の長老大野伊右エ門翁に親炙するようになってから、同翁が途方もなく古い時代、恐らく縄文時代のむかしにまで越谷の起源を求めているのに驚くとともに、一方ではこれに疑いを懐いたものである。ところがこの大野翁の推測どおり、縄文時代とはいかずとも、越谷に早くも古墳時代の遺跡が存在し、当時既にわたしたち越谷の祖先が、元荒川の自然堤防沿いに比較的文明的な生活をいとなんでいたことが判ったのである。それは昭和四十一年の暮に、俄然、大相模土地改良区内の見田方耕地で住居址の遺構が発見されたからである。しかもこれがいわゆる古墳と称する当時の支配階級（双線主？）の墳墓から出土したのとは異なって、それが庶民の遺址であることを知って、私は非常に愉快に思ったのである。世の中では考古ブームとでもいうか、徒らに氏族の長や豪族の遺址の発掘にばかり注目しているのを、かねてから苦々しく思っていたからである。この発掘は当時市内の中学校の先生をしていた高崎さんが先頭となって、ついにここまでに事が運ばれたのである。同氏は元桜井村の村長の家に生れたとかで、純粋な土地っ子であったから、特に学問のうえばかりでなく、郷土愛という観点からも、非常に熱心にこの調査発掘に従事され、この発掘が第一次から第二次へと進み、所期の成果を収め得たのは、全く同氏の力に負うものといわなければならない。解放後の中国で次々と偉大な地下（ちか）資の発見が続いたのも土地改良や道路等の建設工事のためであるが、この見田方遺跡も土地改良工事の産物であった点では、事は小さいが、中国の多くのばあいと同じケースである。

最近、行田市の稲荷山古墳から出土した鉄刀の銘文から、雄略天皇の名とおぼしきものが解読されたことによって、遠く今をへだたる千五百年前の大和朝廷の時代に早くも中央勢力が関東地方にまで及んでいたことが推定され、なお又、その中に出てくる意富比垣を四道将軍の大彦命と推定して、日本の歴史が崇神天皇の時代（西紀前九七年～三〇年）から更に孝元・開化の両代にまで遡ることができると主張する学者もでてきた。　（略）

首長生活19年　（非売品）
1966年10月1日発行
編集発行　故大塚伴鹿初代越谷市長の遺稿を出版する会
埼玉県越谷市大沢1008　TEL 0489-76-6008
制　作　ビール出版


N
発掘予定地
発掘地
主要遺跡
遺物・遺構確認地
重要遺跡と推測
発掘予定地
発掘中
大幹排水路
ホソウ道路
ホソウ道路
発掘地
見田方遺跡公園
斉場
JR武蔵野線
発掘地
H 10. 2. 4 現在